

1973

大正十三年一月二十九日第三册郵便物認可
大正十三年十二月一日發行(每月一回十日發行)

永樂町人編輯



十二月號

【第七號】

明治屋の商出品切手

例年の通り

十二月五日より

御贈答品賣出

同 二十日より

クリスマス飾相始申候

本年は特に精撰したる

特製甘味焼栗

賣出し申候間多少に不拘

御用命願上候

京城本町一丁目

株式會社 明治屋支店

電話(二一三番)
本局(七二二番)



京城雜筆十二月號執筆者

(大體原稿到着順)

平井 三男	(總督府商工課長)	或日の嘆	(二)
尾崎 敬義	(東拓理事)	秋風吟	(三)
松井 民次郎	(平安南道評議員)	田園將蕪	(四)
德野 眞士	(朝鮮鑛業會)	雜筆漫語	(五)
野田 新吾	(朝鮮殖産銀行)	運命觀	(六)
麻生 晋波	(麻生鑛業所)	寫眞に添へて	(七)
名村 寅雄	(大毎京城支局)	終刊物	(八)
加藤 松林	(東洋書家)	交友うつり變り	(九)
坂上 滿壽雄	(滿鐵營業課)	列車雜感	(一〇)
鈴木 銀藏	(本町署高等係主任)	立小便問答記	(一一)
坪内 孝	(京城第一高等女學校)	俳論	(一二)
野崎 眞三	(朝鮮新聞社)	性と性慾に關して	(一三)
志村 四方一	(東拓京城支店)	本町漫筆	(一四)
飯泉 幹太	(朝鮮銀行)	結婚式に	(一六)
多田 毅三	(京城日報社)	半島書壇雜話	(一八)
古城 梅溪	(實業家)	漢詩古事抄錄	(一九)
伊藤 憲郎	(京城覆審法院)	養女の話	(二〇)
中村 櫺園	(京取庶務課長)	豐太閤	(二一)
久松 前平	(朝鮮新聞社)	記者室から	(二二)
早田 愛泉	(京城府人事相談所)	相談所の窓から	(二三)
小水 眞二	(京城佛教慈濟院)	乙食の話	(二四)
結城 次郎	(仁川吉岡酒造場)	國旗の觀念	(二五)
別府 八百吉	(京城日々新聞社)	理外の理	(二六)
青木 戒三	(總督府專賣局)	煙草と朝鮮	(二七)
西村 滿藏	(京城日報社)	新聞哲學	(二八)
石 橋 滿	(朝明舎支配人)	小鳥を飼ふ迄	(二九)
松岡 正男	(總督府醫院外科)	繪の道樂	(三〇)
大村 友之丞	(京城商業會議所)	秋風落寞	(三一)
横田 龍三郎	(日清生命朝鮮支部)	濫澤先生	(三二)
野口 喜代子	(篠田博士令嬢)	大凶變の日	(三三)
雜筆書房主人		樂堂佳筵	(三四)
今村 朝	(李王職)	お歳暮の卷	(三六)
安達 清次郎	(しらぎ屋主人)	先師の墓畔	(三七)
有馬 純吉	(京城日々社長)	空界私見	(三八)
末松 熊彦	(李王職)	月百首	(三九)
山口 太兵衛	(實業家)	京城昔話	(四〇)
永樂町人		雜筆書房漫記	(四一)

(其他社友數氏執筆)



或日の嘆

總督府商工課 平井三男

秋風吹いて落葉あり、是れ天理の必然であり、自然である。天下正道の正否、亦秋風落葉の因縁に結ばるゝものではあるまいか。此の必然自然の天理をだに、明察し豫察し得ざる者に、天下の權を掌握せしむる程、國運を危殆ならしむるものは無い。

一言にして思想の悪化と云ふ。思想の悪化は、悪化するものゝ罪と云はむより、多くは悪化せしむるものゝ罪である。國民の思潮を善導し、國運躍進の一路を開拓するのは、當代政治家の重責である。ブルボン王朝の悪政は、佛蘭西の革命となり、ロマノフ王朝の苛政は、近く露西亞の革命となつた。歴史は昭々たる眼前の大事實であり千古不易の立證者である。況や世界大戦の怒濤の中に現はれた、轉々たる市朝の變を、我國現代の政治家は何と見るか。國史を通覽しても、今の日本程、國民思潮の

歸嚮に迷ふて居る、闇黒の時代は無い。國民思想の統一を、此の渾沌の間に完成し、國運向上の一途を、此の暗雲の裡に發見するの術は何處にあるか。宗教は此の思想の善導には、無力と云はぬ迄も、極めて微力である。國民當面の要求は、哲學的宗教的のものでなくして、經濟的のものであるからである。

憂國の士は、國民思想の左傾を嘆いて居る。然し、國運の指南車たるべき政治家達が、徒に目前の權勢爭奪や、資本家保護に没頭して地底に叫ぶ民衆の悲痛な聲に、耳を傾けない間は、國民は滔々として左極に傾き、思想は刻々悪化するであらう。そして、國民は益無神唯物物の思想に陥つて行くであらう。斯くて、遂にはマルクスの様に、宗教は民衆を毒する亜片なりと誹り。米國の僧正ブラウン博士の様に、天より神を放逐し、地より資本家を放逐せよと、絶叫するに至るであらう。

十九世紀の文明が産出した、貧富の懸隔てふ現世相は、好むも好まざるも、之を直面に是認せねばならぬ。斯様な世態の極底から、其の平等均衡を根本主張として、左傾思想が現はるゝのは、當然とも見ねばならぬ。資本主義に右傾すると、社會主義に左傾すると、俱に人間生活の、根本要求に出づるのである。之を實際社會に按配調和して、衡平平等、四民爲樂の境を如實にすることが、政治家の本務である。故に政治の要諦は、機先を民に制するに在る。政治の歩調が民衆に後るゝ時は、即ち民心の鬱屈となり、悪化となり、激昂となり、暴動となり、革命となる之は必至の勢と謂はねばならぬ。

ビスマルク二十七年の治世は、獨逸強大の主因であつた。そして、彼の鐵血政策の特色は、終始社會主義との抗争でありながら、極めて大膽に、社會主義の長所を採用し、實行し、斷行したことであつた。彼の社會政策が、一面克く社會主義の缺點を征服しつゝ、他面能く國民思想の強固なる統一と、國勢の勃然たる興隆とを將來するに至つたことは、歎夫す可き政治家の先蹤ではないか。思想は大氣の如く、自ら天地に瀾漫するものである。恐怖し、排斥すべきものでなくして、馴致し、淨化し、攝取すべきものである。左傾思想が徒に危險物の如く取扱はれ、眞面

目なる研究が、極めて小數の學者に委せらるゝ、今の日本では、本來毒物の亞片を調劑して、其の偉大な藥効を發揮せしめ得る様な政治家は、何時の世に期待することが出来るであらうか。

X

資本主義に阿ねる社會と、參政權を一部の民に壟斷する社會には、必然思想の左傾悪化を現前する。世界の近世思想史は、一として之を立證せぬものは無い。英國が左

傾するのは、世界の總てが左傾した後であると、ビスマルクが批評した程、保守的な英國の政黨史に目を曝す程のものは、當初の労働黨が、社會主義と結合するに至つたのは、偏狭な選挙法が、男子の普通選挙權をさへ拒んで、參政權を一部の民に獨占したのに、奮激した結果であることを知るであらう。我輩黒思想界の黎明も、國民思想の統一作興も、一大活眼的立場に立つた、政治と政策とが行はれねば、到底之を望むことは出来ない。國歩困難の今日は、一切を

果斷に處理して、一君萬民の國權と、四民平等爲樂の淨土とを、眼前に開拓せねばならぬ。普選の決行と云ひ、社會政策の斷行と云ひ實に春風を日本帝國の山河に漲らす所以であつて、天下と俱に、斯の春風に座せむとするは、國國の一念である。

X

青年逆徒の刑死。——此の一語は一切國民の耳邊の大警鐘ではあるまいか。

秋 風 吟

東拓 尾崎敬義

◆ 秋の夜のわが影高し天上の

月をとらんとするは誰が子ぞ

◆ さわく〜と秋風に鳴る木の葉にも

似たる群少よ愚かしのものよ

◆ 思ひ出の戀はあまりに多かりき

いまだ心の火はもゆれども

◆ 我か春の二十姿を偲ぶかな

母いますかと狂はしき夜

◆ 京戀し京の五月のいと戀し

青葉の頃の戀のさ〜やき

鳶 舞 ぶ 日

東拓 志村四方一

◆ うれひもちて空を仰げば空はれて

鳶がとろ〜と輪を系かき居り

◆ 一列の高きポブラを妨りつめて

疊に秋の陽をあびて居り

◆ 思ふことあまりに多き身をもちて

心せはしき日を暮し居り

◆ 梢すきてちらと光りし蛛蜘蛛の巢の

露をふくめる朝さむみかな

◆ 劇場の廊下の群れにうす覺え

ある妓よと見てちらとふりむく

田園將蕪

—半島都府と支那百姓—

平安南道 道評議員 松井民次郎

朝鮮到る所、凡そ内地人の若干住居する郡廳所在などでも、其の邑を包圍する郊外には、をちこちの畑に、きつと支那人の百姓が三々伍々、土に禮讀でもして居るのか

但しは人糞の杓子に握手して居る様な光景に接するのは必定である殊に京城仁川又は平壤其の他大都市の、町外れに續く畑の大部分は全く支那人農村を形成して、而も其の彼等の社會が、倍々發達しつつあるように見受けられるのは間違ひのない觀察と思ふ。

是等の支那人は、多く山東省よりの出稼ぎで、内地人や朝鮮人所有の畑を借受けて、そうして内鮮市民全般に、朝夕食料を供給する、即ち蔬菜耕作専門の百姓なのである。若しも物好きがあつて、全鮮に亘る彼等の耕作する畑の面積や收穫又は本國へ持歸る金額を統計的に調べたなら、或は朝鮮農業經濟の一大論文になるかも知れぬ。

内鮮人が米國加洲人の其れのように、偏狭で感情的で、更に利害衝突の理由の下に、斯かる接觸を自國民の有利に處理しようとしたなら、随分國際關係として、八釜しい問題と呼び起すかも知れぬが、其所は呑氣寛裕な内鮮人だから、一向平氣なものだ、だが、今斯る意義の著想を除外した部分に於て

此の現象は我等に自省を促すべき好個の問題を物語ることがなくてはならぬと信ずる。其れは

第一、朝鮮の都市に供給する蔬菜はどうしても内鮮人の百姓には、彼等支那人の如くに、經濟的的關心的に、耕作が出来ぬのであらうか。

第二、現在は支那人に代る程に上手に出来ぬにしても、將來内鮮人の百姓に獎勵して耕作させる方法はなからうか、行政廳などはそんな心配は入らぬと思つて居るのか。

第三、若し現状の儘に放任するか、又は内鮮人百姓が、將來到底蔬菜耕作の無能力者で終るとすれば、其の結果はどうなるのであらうか。

こんな風に、種々と考へて行つて見ると、支那人が朝夕我等に賣つて呉れる、廉くて甘い蔬菜も、どうやら咽喉に詰まる様な氣もするのである。

一體、朝鮮人は現在では蔬菜耕作の經驗を持つて居らぬと云つてよい、唯漬物に要する菜類や、大根位ひのものなので、一寸副食物の料理にでもして見ようと云ふ、氣の利た物は作られない。論語の述而篇に子曰飯蔬食飲水とあつて、釋文に「蔬も或は蔬に作

〔B〕

る菜食を謂ふ也』とあつたと思ふ然らば元來論語流に育てられて來た民族であれば、何か菜食に熾つた材料にでも遣ふべく、そんな野菜の耕作に堪能でなくてはならぬのに。好んで水を飲むことだけは達者だが、野菜作りに至つては極めて下手なのは、どうしたものか。

畢竟支那人の百姓と朝鮮人の百姓とは、蔬菜を耕作する思想の出發點が丸で違ふ、支那人は商業より出發して耕作するのであつて、朝鮮人の百姓は自作自給より出發して野菜を耕作するのであるから、進ま田舎に旅行して、眼前に作つてある野菜の一握を買はんとしても、其れは自分で喰ふのだから少しでも賣らぬと斷はられる。初めから賣ると云ふ商賣的の觀念は、毫も持合せがないように見へる。

ソーカーと思ふと、都市郊外の鮮人百姓は、自分に作るべき畑があり乍ら、支那人より野菜を買つて喰べる。十露盤動定で、作るより買ふ方が利益なら止むを得ぬが、百姓の家政として矛盾のようであるさて日韓併合以來既に十數星霜、累代に名總督と政務總監を戴き、農政の當司にも左る人ありと知られて居つて、従つて農業の獎勵指導には、何々十年計畫で、其の遠大の理想と謀圖とは、確かに功を奏しつつあるようであるが、又無いものもあるようであるが、餘りに遠大遠大で、足元にこんな事が後禍を醸生して居ても困ると思ふから、官民互に協力して、實めて十數年の後、在鮮内地人百萬突破の曉ともなつたなら、我等の子孫は、ドーかして朝鮮人の百姓の手によりて作られた、甘くて廉い蔬菜を、朝夕食膳に上ほせて、家庭を樂ましめたいものと思ふ。

雜筆漫語

朝鮮鑛業會 德野眞士

たのも此時代で、思ふて見ると随分古い話である。

◆ 本年一月からの京城雜筆を繰つて

見ると、主要目次に名前を列した名士の數は、百五十數名に達して居る。僅かな社員で、之れだけの人數を専め得た事は、正に吾等の驚異に値する。

◆ 勿論その中には、屢々出る名前もあれば、一度きりで頼とお顔を見せぬ人もある。しかし何れにしても異名同人を除いて、在京地方の文筆家百五十名を集めるといふ事は並大低の努力では出来ぬ。かうして見ると、小さいやうでもこつ／＼と不斷に續けて行く努力の結晶といふものは怖ろしいものだ。此際一つ、苟くも本誌に一度でも名前を出した人は——勿論他界した山口卓夫、兒島定七翁などは除いて——いやでも應でも、邪が非でも必ず何か一篇草することに、臨時増大號を發行して見てはどうだらう。二百頁以上の堂々たるものが出来上る、そつして之れは實に半島文壇の一大偉觀であらうと思はれる。

◆ 閑話休題、此百五十數名の中に、私の相知つて居る人は四十數名に過ぎぬ。こちらは名前も顔もよく承知して居り、先方は何にも御存知ない連中も可成りにある、時實秋穂、吉木戒三兩氏の如きがそれである。之れは先方がいろ／＼な

意味でエライ人であるから當方が知つて居る迄である。

◆ 殖銀では有賀頭取、森理事、野出課長の知遇を得て居る。櫻井氏には昔京畿道の財務部長時代にお役所で、たつた一度お目にかゝつた事があるが、只今は路傍の人で、如何に頭のよい人でもそんな事があつたかとは思ひ出せまい。中島司氏は『壽町の家』の先輩で、二階の柱に片假名でナカシマヒトシと、子供の落書の痕などが残つて居るので、いつか一度は話したいと思つて居るが『奇遇』したいといふ野心があるので、今にお目にかゝつて居らぬ。此外守屋三葉氏とか誰れとか、數へれば殖銀には本誌に縁故淺からぬ先輩が多い。しかし曾つて一度も金を借りたこともなければ預けた事もないから頭取でも理事でも、皆個人として相知り個人として知遇を辱ふして居る次第である。だが若し私が賞與の五萬圓も貰つた場合には矢張り殖銀に預けやうと思つて居る。

◆ 大村友之丞氏と初めて會つたのはたしか明治四十一年頃だと思ふ、氏が大阪朝日の特派員時代で、場所は鎮南浦の長谷川義雄氏の宅であつた。先日大村氏と話し合つたら、あの晩古藤是空氏邸で吾等が善哉會といふ句會をやつたさうだ有賀頭取が鎮南浦税關長として來

大村氏が京城商議に入つてから、

府廳の隣りの事務所で、今村燦炎先生に會つた事がある。先生はその時の本町署長で、お隣りの會議所にはよく遊びに行つたものだ、私と書記長室に落ち合つた日に、窓の外に朝鮮銀行の建物を眺めながら——一體朝鮮といふ所は仕事の割合には人間かエラ過ぎる所だよ、鹽釜だつてさうじやないか、内地の知事に手の生へた位の人物で丁度よいのに、首相級の寺内伯などは勿體ないよ。鮮銀、東拓は勿論僕の本町署長にしろ、君の書記長（大村氏に）にしろ、皆仕事よりも人物の方がエラ過ぎて居るよ——と滔々と怪氣焰を擧げて居つたが、今村のおつさんが果して今も覺へて居るかどうか。其後私も田舎廻りをやり、先生は濟州島の王様に出世し、元山の府尹を経

◆ 隨

松寺桂陵

歸るさは満さんとてや漬つたふすなざり人の籠の大なる

て京城に舞ひ戻つたのだと思ふが今年の五月、喜代中の平南會で會つた時には、昔見た事のある顔だとは、どうしても思ひ出せなかつた私も忘れて居たのだが、先方では今でも私を知らぬだらう。

篠田氏には平南道尹時代、官邸にお伺ひして一寸支關でお目にかゝつたのが初めてで、其後非常に御世話になつた。此外書けば際限がないが、松本永樂町人と私との事は、何れ項を改めて書いて見たいと思つて居る。

銀行屋
の見たる
運命觀

殖産銀行 野田新吾

三

松本さん

私は凡ての人に運命簿記の記帳をお勧めして、天との借借を出来るだけ明に記入し、天よりの負債を成るべく少くし、何時も天に幾分かづの預け勘定を持つ様に心掛けたいと思ひます。子孫への遺産も美田よりも黄金よりも此天への預け勘定を傳へたいと思ひます。一國の興亡、一家の盛衰悉く是れ天との借借關係の變化に過ぎませぬので、古今の史實に徴して昭々乎たるものだと思ひます。彼の山陽が日本外史に論じて居る様に、當時青二才の一頼朝が孤影寂然伊豆に白旗を挙げた時、あの大勢の關東武士が時到れりと馳せ参じ、

さしもの平家を物の見事に西海の藻屑と失せしめた事は、元より頼朝が英資に依るは勿論だが先祖の義家が往年關東征伐の後部下の論功行賞に當りお上より受く處少き爲め自分の領地を殆ど全部預け與へた其恩義に因るものだと山陽は喝破し居る通り、義家が天に背した勘定が頼朝に至つて頼朝の英資となり關東武士の馳参となつて酬ひられたのであります。殊にあの時最も面白いのは清盛が殺すべき頼朝を常盤の誦を容れて流すに場所もあるうに伊豆の大島に定めたこと云ふ事は平家にとつては大失策ではあります。此間天の配劑の頗る妙味を感じずには居られませぬ何時も吾々は唯其結果から見て幽かに天意を察知するに過ぎないのであります。

四

松本さん

運命簿記は記帳が中々六ヶ敷いの

銀行屋と云へば先づ算盤高い無趣味な人間味の乏しい男を想像するんでしようね、そりや朝は九時から午後五時頃まで紅葉が散らうが木枯が吹かうがそんな事にはお構ひなしにセツセと借借關係で終始して居るんですもの。

併し之でも銀行屋には銀行屋としての哲學もあれば宗教もあり人生觀もあれば運命論も持ち合せて居ますよ、ナニ『大變な怪氣焰』ですつて、そりや血の氣の少い銀行屋でも時には氣焰を吐きますよどうです一つ銀行屋としての運命論を聞かせましょうか、黙つて謹聴しますか？、處で一寸斷つて置きますが、何れ銀行屋の云ひ相な議論なんだなんて一寸聞いた丈けで頭から輕蔑して掛つては論旨の價値が判りませんから、大哲學者が古今の大眞理を説明するんだと思つて謹聴するんですよ。

二

松本さん

今年も餘日少く一年中の決濟をすべき日が近づきました、借りた者は返さねばならず貸した者は遠慮なしに請求します、私共は謂はゞ之が商賣ですから致方もありませんが、世間一般の人も之を當然な

事だと思つて居る様ですね、處が若し借りた方が全然忘れてしまつたと假定したら如何でしょう？、借金で盛に物慾を満足させて居る間はよいとして返濟を迫られたらそれこそどんなに驚きもし困りもし又怒りもするでしようか、丁度人生の永いコースに於て得意の時には有頂天となり運命の神から借りて居るんだと云ふ事を忘れて、

之が決濟を迫られ失意の境に陥つて俄に今更の如く驚き悲しむと同一ではありますまいか。私は時々窮狀に陥つた借借對照表を見ますが何れも貸勘定は甚だ内容が奢窮だか借勘定は退つ引きならぬ分ばかりです、併しこれでも記帳のお陰で窮狀に陥つた原因と經路とは明に知る事が出来ます、經營者がモット早く活眼を開いて失敗の原因を排除したなら斯くも窮境には立到らなかつたらうと思はれます。處が運命的に窮境に陥つた人は如何でしょう、果して其原因と經路が分つて居りましょうか？、徒に天を恨み神を怨むのではありますまいか、今の世の多くの人は運命的破産を招くべき天よりの借金を返濟しようとはせず、寧ろ負債が増せば増す程有頂天になつて自ら好運なりと喜んで居る様ですね、私は何時もこれをおふと慄然とします。

です、普通簿記は權利義務の觀念を基準として貸借關係を明にするんですが、運命簿記は因果律の信念に立脚して天との貸借を論ずるのです（茲では單式運命簿記を云つて居るので複式運命簿記は目下研究中です）従つて普通の貸借は双方合意的に行はるゝのですが天との貸借は必しも然うではありません。元來天は變化を好む本性がありますから何人に對しても貸借零にして置けば人生は頗る平坦で無事なんです、そうは致しません、天は何人に對しても常に吾人の承諾なしに勝手に貸したり回収したり又預つたりするんです、又吾人も不敏なるが爲め天意に背いても借りた上にも尙借りを増やす事が往々あるのであります。

又貸借の期間は多くの場合天の方で勝手に定めます、唯吾人は正確な記帳に依つてのみ大體の期限を豫知する事が出来るのみです、それ故随分長い期間がありまして五十年や百年は珍らしくありません併し消滅時効は絶対に無いのでありますから之は堅く信じて貰ひたいのであります。

五

松本さん
私は簿記學上或は會計學上最も困難な事は評價だと思ひますが運命簿記に於ても然うです、見方によつては評價は記帳の總てであるとも云へるのです如何に計數が正確に記入せられて居ても毎期〳〵監査役が承認して居ても破産したり失敗したりする大會社大銀行のあるのは此評價の上に於て誤謬があるからであります、運命簿記に於ける評價は尙一層六ヶ敷いのです今手近な例を擧げると昨年關東の

震災に際し數萬圓の寄附をした人がありとする、普通簿記ならば之を數萬圓の損失金に立てるに何の難作もないのですが運命簿記では此寄附行爲によつて直ぐ數萬圓丈け天に預けたとは記帳が出来ません、先づ其人の心情を考へて若し之が世間への體裁や一種の虛榮心から寄附を餘義なくされたものとせば何等天への貸勘定は起らぬのであります。（尤も此寄附金を出さねば更に天より借りるべかりし負債は免れたかも知れぬが）而も之が爲めに新聞紙上や其筋から躍々しく褒賞せられたとすれば、其

れ丈け借勘定となります、又只の一圓の慈善でも其心情によつては百圓にも千圓にも貸勘定となる事があらうと思ひます、長者の庶幾よりも貧者の一燈とは運命簿記の一原理であります。
右の様な次第で此評價を正しくするには日夜修養研讀寸時も怠らず常に極めて高潔な極めて敬虔な態度で如何も情想を純潔にし信念を堅固にして天意のある處を察知し、些の私心を挾まずして一事一物、一言一行を評價記帳する事に努め以て變化多き人生を樂み限りなき運命を開拓したいものであります

寫眞に添へて

東京に於て 麻生音波

冠省、例の冊子——『咸北の大富源』を郷里にも頒布したので竹馬の友達の内には種々の手紙をくれます、殊に小生より一歳上の友人にて宗教家たる某よりは却々面白い好意的な手紙です、この友人は小生を白髮のヨボ／＼したものと思ふてか實に同情的な手紙です、そこで小生は十五年も故郷に歸らぬから斯く誤解（？）せらるゝものと信じ、本月二日に寫眞を撮つて送りました、小生は老人ではない、この通り元氣です、何も老人扱ひの御心配は入らぬといふ意味の手紙をやりました、この寫眞は前後友人と少し飲み過ぎて居つた加減で眼が膨れて居るやうで甚だ不出来ですが尊臺にも一枚送りましたから見て下さい、どうです元氣でせう、小生は毎年一度は寫眞を撮つて置く考でしたけれども、この二三年は忙しので寫眞を撮る氣分にもありませんかつたが今日は大借歌を企て、大奔走中ですが却つて氣分がスガ／＼して張りつめて居ります、所謂緊張とはこの事でせう、大借款成立前の寫眞です、成立後であれば尙一層元氣になるでせう（十七日）。

喜終刊物

大阪毎日京城支局 名村寅雄

同業者との團體旅行に恐れ(?)を抱いてあんまりそれをやつたことのない私が最近——某地視察と言つて誘はれて『いまに著名になる某地だから』と思つたりしてフト行く氣になつたのがしくじりだつた。

◆ 新聞社と金一封。——さうした場面がある如うには聞いてゐた、然し私はこれまで、それらしい場面が展開されはしないかと思はれる所へは例の用心かなめに出席しなかつた。めか、幸ひにそうしたことには直面したことが大毎入社一度もなかつた、所が最近トウムく初めてそれによつて仕舞つた、いやらしかつたこと彰しい。

◆ 『視察の爲め御光來』とある、而してそれが新聞社さまと來ておる土地の歓迎會の「べん位は免れぬ事と觀念してゐた、果して型の如き歓迎會が開かれた、答辭役を仰つかつて『お盃頂戴は酒を飲めぬ自分故に御容赦』まで付け加へてお役を務めた、大分盃が廻り來りつる頃ほいであつた、主人側の一幹部が私の席に來て耳打ちをした曰く『お察い折柄折角お招き申したれど何のお構いも致し兼ねたる段失禮平にお赦し、就ては金一封些少ではござるがゴ銘々に差上げたく存するが……』フア—

失敗々々と腹の虫が叫んだ、さて出て來るぢやなかつたわいな々々。

◆ 全く當方自らが赤面致して仕舞つた、赤面が終ると今度は先方を蔑しむ氣になつて來た、同じ護憲派のOさんと語つて宿へ引揚げて仕舞つた、然るに金一封は遂に宿屋へわれ等を追つかけて來た『取らさにおかかんこつちも切腹ものぢや』!、ドウやら少々眞剣らしい——『如何に仰せござつてもわれ等には寸分譲歩の餘地ござらぬしたが左程にゴ執心とあればゴ銘々におあたりあつて各々の好き氣儘にお委せあつて然るべし』…。

◆ 惡辭苦闘辛ぶじて金一封子はわれ等の控室を去つた、O氏と相顧みて苦笑!、『護憲萬歳』のカップを捧げた——控室が違うので遺憾乍ら反護憲派があつたか、あつたらしいがドウ始末されたは雜筆社の秘密會に譲つて記録は止める。

◆ 助からないナ、大失敗!、實際不快でたまらない、世間も誤つてる記者も過つてる、私は斯う思つて嗟嘆した。翌朝『護憲派拒否』が一封子側を狼狽せしめ且つ少からずその良心をさいなやませたことを知つた、われ等は二三の達人達がわれ等に對して慚愧の面持

ちであることを擧取し且つ又或る一人から、失禮御免の陳謝を受けた、歸途知事△氏に會つた夜來の喜劇を笑談した、△氏は極く眞面目だつた、さうして『果して失敗つた、實は金一封贈呈計畫のあることを知つて、うっかり一律にそんなことをしたら失敗するぞと注意しておいたんだが、トウムくやつたです、困つたね、そりや不快はお察しします』と言つて私の心持ちに共鳴した、私は『一律にやると失敗』△氏のことばに無限の興趣を感じてゐた。

◆ 斯うしてこの旅行は私に取り失敗でもあつたが又收穫もあつた、それは『金一封』の實演に直面したからだ、新聞記者として苦い而も尊い體驗であらう。

◆ 今年中でのしくじり話、蓋し『終刊もの』には應はしいと思つて、締切りをせいておられる松本さんに亂雑に書いて出すこと如件。

◆ 小瀧氏の詩

吉田 莊 一

久原鑛業京城事務所の小瀧さんが詩人肌の珍らしい人柄であることは、前號にも書いたが△氏が先年大阪——千日前に遊んだ時の詩がおもしろい。

食後孤筇千日前、叫聲管鼓轉驪然、相看不識人無笑、俸費之居十五錢。

即ち氏は十五錢の芝居を見た、處が歸りに俚に乗ると、それは賃金六十錢——正に芝居の四倍に當る茲に於て歌あり、曰く

安芝居見たる歸り車賃の
さて四倍となるぞおかしき

交友うつり變り

東洋畫家 加藤 松林

近頃文壇で、時々その名を見受けるやうになつた横光利一、あれは古い私たちの仲間で、目白の女子大裏の六圓三十銭の家で四五人が一緒に自炊してゐた連中の一人であります。學校の方は大抵休んで

何かしらえらくなるやうな夢見てゐた、文學不良少年の一人でしたが、近頃やつとまあ世の中へ出たやうです。目も細く身體も小さい男で、三重あたりの請負師の息子でした。三四年便りも絶えてゐる間に、いつの間にか名前が出て來たので驚ろいたことでした。久しぶりで逢ひたいものです。

此處へ來てからの一番古い友人は經濟協會の眞鍋康君でせう。これはまた苦勞的な男で、十七八の時分から母親と弟妹四五人を養つて來て、當年二十九才、明けて三十の今日迄童貞を守り通したといふ評判です。これはいゝことか悪いことかは知らないが、一二年以前に弟が高商を出てからは生活も餘程樂になつたやうですが、永い間の忍従から相當頑固な性格が出来上つてゐる。いつかこの雜筆へも啄木ばりの生活歌を出したと覺へてゐます。

獨りで何か考へ込んでゐる私の性質として、朝鮮へ來てから五六年親しい友も多くはありません。

京日の河西君なども古い一人ですが、近頃は餘程遠くなつた。向ふは毎日忙しく、自分も何かと追はれてゐて、いつか炬燵にもたれて冬の夜を語り明した頃がなつかしい。

今村燦炎先生なども古くからお目にかかつて知つてゐるのですが、今にお訪ねでもして親しくお話を聞いたこともないのです。工藤武城先生などもそのとほり、同好會などで時々お逢ひするばかり。

雜筆主人松本先生とはじめてお會ひしたのは確か、其頃黄金町の瀧呂木七段の家でした。酔ばらつた瀧呂木さんが、御馳走に温突を焚き過ぎて、危く火事にならうとしたその朝でした。其後一年、京城へ出られてからは少なくとも週に一度はお訪ねします。近頃は忙しいのであまり將棋も指されぬ。

殖銀の森さんには、まだ南山町に居られた頃、雜筆主人と一緒に訪ねたのが始めてです。脚を痛めてゐられました。暗い庭に何か木の葉がチラチラして、涼しい六月の夜であつたと覺へてゐます。それから間もなく、私の作品を他へ御紹介願つて、金を渡すから出ておいでと、お訪ねした、その歸る時でした。左様ならして支關の戸を閉めやうとした時『落さない

やうに氣をつけて』と呼んでくれました。高い石段を下りたのも知らず、涙ぐむ程嬉しかつたものです。松峴洞から今の中學洞へ移られても、大抵月に二度はお訪ねします。何かしらお願ひに行けばかり——たまには愉快な報らせを持つて行きたいものです。

最近には鑛業會の徳野さんとよく碁を打ちます。このあひだは午頃から夜の一時迄——この春平驥を立つ時は、旅の私が驛に見送つたのも妙でした。

畫家仲間とは餘り往復しませんが、近頃は酒も飲めず、交際するのも苦しい氣がします。それに刺激のない無駄話には飽き／＼する。

ともあれしみじみと話の出来る友のありたいものです。そして、秋も更けた今日此頃は、特にかうした平凡な感傷が湧く。

◆加藤賢博士

平田 久雄

京城府の加藤博士、氣概の人で同時に酒盃の人であるところ。いにしへの李太白を偲ばせる、無二の親友に總督醫院の小林細菌博士がある。この人も大の好飲家で、丁度古への賀知章といつたところ。二人で當世を慨しつゝ、酒盃を擧げやうものなら、遂に慷慨嘯となり、厭世厭人嘯となり、果ては相擁して慟哭するといはれて居る。今の軼俊、浮薄な世にマダ斯うした眞純な入があるのは頼むしい。

列車雜感

滿鐵營業課 坂上 滿壽雄

の心は風の徂徠に對すると同じく無我無執の心である。

◆列車内でより非禮讓なのは二等室に於てだと云はれてゐる。それは數の比例に於て殊更に目立つものには違いないが悲しいことではある。三等室に於て仲々に不作法なのが多い。

◆冬などその昔上村艦隊が露艦を見失つた時に——斯うした日もあつたらうやうに思はれる程、煙草の煙で一杯である。新鮮なる空氣は一立方尺金若干圓と經濟價值が發生しそである。氣持の悪いもの一つ。

◆夜汽車——聯絡船——の女は殊に見悪いものである。それが朝になると美の創造期が訪れた様に身粧ひすることは淋しい心もちを抱かせる。汽車中は家庭内ではないから美しくありたいものである。

◆三等客も一夜を汽車で明す人は

快心の稿

大村友之丞

無理に書かうと思つても駄目です、興味の湧き来るを待つて一氣に書きませう、寫真でも會心の撮影の出来るのは、一年に一回だそうです。

寢臺を利用されたいものである。それは中産階級以下の文明を享樂することの一つである。

◆急行列車には一等の展望室がある。鷄林八道の地もとより觀賞すべきものに少くはないが汽車の窓からは赤土と原始時代の家屋だけである。しかし汽車の中でも文化價値の創造とそして文明と文化の抱合が如實に展開されてゆくことは慶すべきことの一つではある。

◆停車場の賣店でマツチを買ひますと無報酬で書いたやうなポンチ畫の未完成のままの繪に安物の繪具を塗りつけ説明書かしてある曰く。

お互に座席を譲りませう。

お互に車内を奇麗に致しませう

お互に不行儀な事を止めませう

降る人が濟んでから乗りませう

◆マツチの包装から道徳を教えられるのもあまり心持ちの良いものではないがマツチを倫理の助手になければならない程交通機關の内部に於てそれが保たれてゐないといふことは悲しいことの限りである。現行民法上に於ける禁娯治産者として資格充分なる殿様の『遠慮したがよからうぞ』よりはこの『……ませう』の方が社會生活に於て倫理上の強制力を承認さるべきであらう。

◆列車内は或る意味に於て全體社會の縮圖であり又社會生活の重要な現象である。それなのに『旅の耻はネー君』式の非禮讓の多いことは悲しいことだと思ふ。私は生活相の批評がいつも正鵠でないことの多いのを遺憾とするものだから『あらまア随分だワ』式の云草は避くべきことの限りだと思つてゐる。けれどもある生活秩序の正當觀念から出發して『であり度い』希望の表示は不可避のことであらう。

◆總ての人はその座席を全く自己の所有だと考へる、それはさむらいの城塞を守ると同じ心持であるそれが正しくない意識だといふのではない。法律上占有についての討論がなくても『良俗』といふ觀念によつてそれは保持されねばならないことである。それが下車するときは何の執著もなく放棄若くは譲渡をする。しかし座席を占有してゐる間は多少不當であつてもそれが正當であると主張することは平氣である。二人分の座席に横臥してゐる場合に混雜のために何人かに起きることを要求されても『濟みません』とか『どうぞお願いたします』とかの被恩惠者としての願望語を無意識のうちにでも要求してゐる。制限時間内に於ける強い占有感だとも考へられる。

◆長い旅では隣り合せる人や向ひ合ふ人によつて心持ちが違ふ様である。何だか話相手にもならない懸隔があると軽い失望を覺える。丁度若い學生が電車などで若い女性と隣り合せることが何となく快いことであるの本質的には違つても共通心理である。それなのに汽車で出來た友達に夢の中の知己の様である。どこかの驛で下車してゆく知人を送るときは多少の離愁を感じるのだがそれが次の驛ではもう全く忘れられしまふのである。行人を送り行人を迎ふる行人

立小便問答記

本町署高等課 鈴木銀藏

松本さんから何か書いて送れと云はれても一體吾々は人の前に提供する丈けの脳味噌が缺けて居るので——茲には唯多年實地に體驗した事を書き綴つて差上げる事に致します、お笑ひ草として御覽を——。

密淫賣や藝者や乃至博徒連中は、警察で取調べを受けて苦痛を覺えて居るから『警察はイヤだ、巡査や警部は嫌いだ』と云ふものと思ふたらそうでなく、一般的に『警察官が嫌いだ、警察はイヤだ』と云ふのである、扱て火事、泥棒、兇弾の出没に際しては警察官の姿を見ると心丈夫である事恰も病人の家に醫師が来る様なものである而已ならず營業を願へば許可して呉れる、道を聞いても教へて呉れる、何處に嫌からるゝ處があるのだと疑はるゝ。私は内地に務めて居た時七つ許りの女の子が交番に來て、今夜夏祭にお母さんに伴はれて町に出たが其母さんを見失ふたと保護を求めて來た、暫くすると其母親も亦娘を探して交番に來たが娘は交番に居つて非常に喜んだ事があつた、其父は醫師であつて母親も亦相當教育があるので平素巡査は怖いものでないと判つて居つたと云ふ。之れに反して現に京城の市中を制服で通つて見ると泣く兒に私を指して『ソラ巡査が來た』と云ふて鬼でも來たやうに子供に脅威を興ふるのを見る、こ

う云ふ密習から蟬脱せざる限り警察と云ふものゝ眞の理解が困難である。近頃口癖やうに警察の民衆化、民衆の警察化と叫んで居るが此の幾部でも實現は時間を要するものと思はる。一體警察と一口に云ふが本町署の如きは警視が一人警部、警部補が十五人、巡査、巡査部長が二百廿餘人（内鮮人合せ）で署長が示した方針に就いては十指を動かすが如くならざる可らざるに、十人十色の喩の通り人間一人／＼頭が異つて居るので往々間違ひが起る。此間違ひが警察悪評の因と成るのであるが又一面民衆の側も自己を糊に卜げる事はよくない、京城府廳の裏條崎商店横小溝へ立小便する民衆と巡査の出來事を其儘に紹介すると下の通。

巡査『オイ君なぜ其處へ小便するか』當人『小便したいからしたのだ、オイとは不都合だ巡査の癖に』——此時巡査は一杯機嫌であるから對手にせず無言。次に來る立小便に對し巡査は、巡査『モン／＼其處は便所でありませぬ』當人『便所でない位のこととは知つてゐる』巡査『然らば其處へ小便するといかぬ』當人『する處がないでないか』——巡査飲んだ歸りと見て黙。それから小便を見て巡査知らぬ風をして咎めぬ、すると、

當人『あの巡査は新米だな僕が溝へ小便をしたのを黙つてゐる

』——巡査聞かぬ風。

更に又次の立小便者に對し、巡査『君溝の中に放射するのは仕方がないが道路にしゃ／＼とやつては困る』當人『道路は悪い溝なら差支へはないか』——此處に押問答となり遂に感情上喧嘩の標になる、多數見物人が集まる、不得止本署へ同行する結局當人が不利に陥る。

之で矢張り警察が嫌はれる、智者も識者も巡査の職務に同情を有つて居らざれば如何に良巡査なりとも民衆に満足せしむる事が出來ぬ立小便を黙過するのは悪いとして一口之れを制止すれば府廳の裏では警察犯處罰規則にて毎晩十四五人位料金を取られる事になる、其人は皆警察嫌ひになる譯である。が路傍便所の設備が乏しいから不得止ことゝして黙つて居れば新米巡査と侮られる、實際巡査の職務も立つ頼がない、と云ふことを立小便に例して双互の理解を切望致します。

二つの時計

平田久雄

標準時計で有名な村木時計店の彌藤さん、愛想のいゝ、あつさりした人だが、いつも金銀二つの時計をポケットに忍ばせて居る『何時でせう』といふと『サア』といつて同時に二つの時計を出す『サスガは時計屋さんですね』といへば『イヤ苟くも標準時計を標榜してゐる以上はね……』と微笑する▲鬼に角責任觀念の強い人で、七八圓の安時計でも詮議に詮議をしてお客に渡す、決していゝ加減な品物を渡さない▲先づ新しい時代の最も良い型を代表した商人だ。

俳論

京城第一高女 坪内孝

【一二】

櫛板會と銘打つた畫會が月波亭で開催せられた時の事であつた。この時の主催者は寺尾公天氏で案内状の端に『月の波碎けて寄する月波亭』といふ句が添へられてあつた。席書も一順了つて雜談をして居た時、松寺桂陵氏がこの句に『桂の花も匂ひそふらん』といふ下句を附けて穩やかに和歌にされた巧妙さを稱讚する人もあり、自分がこの句を換骨脱體して『月の波碎けて散つてかつよせて夕べすしき月波亭かも』と和歌としたのを見て、御ていねいな歌だなあと云つて擲論された人もあつた。その時ふと齋藤物外氏が、月の波の句のやうな客觀的の句は駄目だ、どうしても句は主觀的のものでなくてはと云ひ出すと、公天氏は黙つては居ない、甲論乙駁その盡くる所を知らなかつたが、この日は遠來の團體を送る義務を持つて居た日なので、吳越の人は同じ自動車で停車場に馳せ付けたのであつた。

その後ある茶亭に四五の人が相會することがあつたが、その時は、平野天桂先生、時實米山氏、齋藤物外氏、寺尾公天氏と自分とであつた。席上偶々碧梧桐の句の懸けられてあるものがあつて、這般の俳論は端なくも再燃するに至つた——物外氏も公天氏も持論を曲げない。その内に碧梧桐の句はどう

だといふことに及んだ『殖林の小徑海まで』これは句かどうかと米山氏は鋭い問題の鋒先を自分に向けられた。自分はこの詩は結構ですと答へると、米山氏はお前は赤化して居ると云はれた。自分は詩に於て赤化して居ると思はれなかつた。が物外氏並に公天氏の説にも全然賛同することの出来なかつた點は、主觀、客觀の議論よりも兩氏は共に第三者の感想を目標として居られる口吻があつたことである。

その後十數日を經過したある夜、天桂先生の宅に催さるゝ美屋飛會と稱する和歌の例會があつた。米山氏が不意にこの夜天桂先生を訪れられた時は、會員諸氏の當座題の詠出を囑辭がましくも自分が批評して居る所であつた。自分は米山氏の歌論を聞きたいやうな氣がした。それは氏の俳句に對する態度からの思ひ付きであつた。が氏は多くを語られなかつた。

會を閉ぢやうとして半ば遊戯的に連歌をして見ることにした。工藤擔雪氏の上の句『ながき夜をねられぬまゝに起き出で』といふに米山氏が下の句を附けることゝなつた。米山氏は直ちに『北漢山を見つ飲む』といふ字足らずの句を附して自分に、どうだと示された。蓋しこれは前日の碧梧桐の句を賞揚したのに報いられたのである。

『板擔く人もありけり世の中は』といふ松寺桂陵氏の上の句に下の句を附するのは自分の役であつたが、米山氏に代詠を願ふと氏は直に『籬に角のかゝる大牛』と附けられた。自分はかゝるはなくてもよいでせうと云つて極めて淡い復讐の喜びを感じたのである。工藤夫人の『さだめある命つきなばかへらなむ』の句には『またその上は分別の事』と米山氏が下を附せられた。その外

あすは又とおきばやと思ふ也
中島桂谷氏
出勤九時におくれざるやう
時實米山氏
唯樂しありとしものに幸あがりて
平野天桂氏
うたうたひつゝ一日すこさむ
小林桂月氏

などの連歌があつて興は容易に盡きなかつた。會を了へて戶外に出づれば秋朝く深うして蟋蟀の聲あはれに自ら人をして衣襟を閉ぢしむるものがあつた。

河内山火災

吉田 壯一

河内山火災社長が、珍らしく前號に『文明の匂い』といふ歌を畫かれた▲處が、あの稿を讀んだ人々『近頃俳味の多い文章だつた』と馬鹿に評判が好い▲處が、それはその筈だ、あの人の本領は俳にある、句にある▲そこで『句を下さい』といふと、『イヤ俺のは人前なんぞにや出されん』——藤々欲しくなつて、目下強談中▲果してうまく口説き落せるかドウか、醫れ乍ら心細い。

性と性慾に關して

朝鮮新聞社 野崎眞三

◇性慾の感じ方

性慾を遊戯視する事は罪惡だ。性慾は本能だ。其性慾を徒に禁壓するも不可能であり節制のないのも更に不可である。要は性慾の前に嚴肅であれと云ふのが私の性慾觀である。

此性慾を人間は如何に感ずるか——人間の五感の中では眼が最も多く性慾を感じやう何と云つても視覚が第一であるが其鋭さから云へば視覚より聴覚嗅覺の方が鋭い異性の具——思春期以後の體具は性慾衝動を發する力強いものである更に觸覺は力強い。性慾を嚴密に考察すると接觸慾と排泄慾に分類し得る。嗅覺に感ずる事それが既に性慾の一部の顯現なのである。否時に性慾は接觸のみの場合があり、排泄慾は其結果として伴ふのであるとも云へる。次に性慾衝動は一つの力である。そして此衝動不可思議なる力を我々は身體の何處に感ずるか。

私の經驗では此力の感ずる場所、即ち衝動を感ずる場所は各人各個であり年齢境遇に依つても區々であるが、大部分は胸にシヨックを受ける。此場所が生殖器に近いだけ動物性に近いらしい。私自身では臍の上部に感受し其衝動は背柱へ廻つて縫際から〇〇へ迷走して其先端で消失する。此衝動の走

り方も注意を加へて居れば明白に感ぜられるのである。又或る人は頭に感ずると云ふが此感じ方は不確らしい、又直接局部に感ずると云ふ人もあるが之も不確である。先づ人間は胸部に性慾衝動を感ずるのが普通らしい。

◇夫婦間の性慾問題

性的關係が物品化し商品化する場合を私達は賣春婦に見出す。然るに夫婦と云ふ關係に於いて性の問題は決して物品化は許さない、相互に之を人格化する事が夫婦間の特質だと思ふ。處が男女兩者共に

時に此性的方面を罪惡視したり遊戯視するものがある甚しい誤で、

——此性的交渉の人格化を顯現しない場合に先づ性的良史の第一頁があるのである。次が其性的交渉に於ける兩者の量と質との相違は更に恐ろしい夫婦争鬭の悲劇を生むのであるが、搦て相互の人格化と云ふ眞鍮な希求と努力を缺いた場合は一層恐しい深淵が展開されるだけである。故に私は飽迄夫婦間の性的關係は相互の人格化だと云ふ事を高唱したい。従つて男性は女性の前に敬虔な態度を以つて性的交渉を行ふべきである。昔貝原益軒先生が書問靜に人を避けて閨房に入つた嚴肅さは吾人の學ぶべき點である。又一方動物には交尾期があるが人間は聰明な判断を有つてゐるので四時自由であるだけに放縱に流れてはならぬ。最も嚴肅に相互の人格を重んじた交渉であらねばならぬと信ずる。

◇本プラ雑誌記

吉田 莊一

不二興業の澤村さんと云へば、相當多忙な人であるが、讀書にはよく趣味があると見へ、折々大阪屋や日韓書房の店頭で見うける▲而も或時は紋服姿で、或時はカスリか何んかの平常著で——▲又先日鑛業會の徳野さんが大阪屋に這入るところを見受た▲先生どんな書物——雑誌を買ふのかと氣をつけて居ると、曰く『隨筆』——いかにもあの才人にふさはしいと思つた▲秋の一夜本プラを試みて居ると今村李王職が向ふから來るどこへ行くかと見て居ると、ツツ

——とちよぶや店頭に入つた、さしては先生お嬢さんの著物でも……と注視すると、今、大宮人と街頭の文豪(店主)とが握手して居る▲僕の記憶に誤りなければ、この兩雄は初對面の筈である、果して何を問ひ、何を答へ、何を共に哄笑したか——▲これは宜しく双方に『兩雄會見記』を書かせるに限ると思ふ▲加藤松林君はよく道具屋なんかで物を買つてのを見る多きは例の美しい夫人御同伴で▲それから屢々見かけるのは京城新聞の石本さん、なか／＼よく讀む人と思へ、大阪屋などでいろんな本をひろい讀みして居る雄姿を窺見する。

本町漫筆

—看板拜見の記—

東拓京城支店 志村 四方一

〔16〕

看板に、偽りなしといふ、また看板は店の『まねき』といふ。この故に、商家は競つて看板に意を注ぐ。

呉服店のシヨウ、ウキンドウに陳列された、季節々々の派手好み、意氣好み、さては上品好みの新柄や、濃厚な魔のやうな光を放つて人を引きつけやうとする、貴金屬商の飾窓には、私は何の用もない私は、散歩する時——若しそれが秋から冬の初めであるならば、和服の著流しに懷手といふ、氣儘ななりで、兩側の看板を眺めながらとぼくと空想に耽りつゝ、當てもなく街を徘徊するのを、道樂の一つとしてゐる。

震災前の東京に於ける、銀座から須田町へかけての商家の看板には私の眼を喜ばすものが尠くなかつた。春洞、鳴鶴、默鳳あたりが、毫を振つた。櫓の看板は、威風四隣を拂ふ將軍にも例へやう、一六、梧竹の俗を脱したものには、高潔な仙士の趣があり、また少し變つたところで、不折、碧梧桐の俳味溢るゝものに至つては、思はず時を忘れて、佇ませられることも屢々あつた。石塚ものは、商家

の迷信もあつたとかで、京橋、日本橋邊の間屋筋には殊に多く、その典雅温潤なる書風のうちには、また古淡掬すべきものあり、とりどりに面白く、市街の美觀をなしてゐた。

さて、京城へ来て、殊に本、ラをした時、京城の銀座といはるゝ本町街に、看板の見るべきものが一つもないのに、心細さの感を深くせずには居られない。狭い街の兩側から、俗悪見るに堪えないペンキの看板、而かも不必要な横文字まで書き入れたものが暴威を振つてゐるのを見ると、ほんとに、頭痛がして来る——。

然し、中に就て、仔細に觀察すれば、多少看板らしいものがないでもない、俳句や和歌の選者の態度で、本町一丁目から、途順に看板の『選』をしながら、それに短評を加へて見やう。そこで、念の爲め斷つて置くが、看板の批評は、いはゆる、看板の批評にして、商店の批評に非ず、従つて店或は家そのものの内容には、何等觸れるものがないことである。

京城郵便局 先づ、本町の入口京城郵便局の看板から初めよう。

南大門通り鮮銀前の大廣場、その一角に聳り立つ間口五六十間もあらうといふ赤煉瓦の三層樓は、確かに、京城の一偉觀である。その大建築の何物なるかを表示するべく、正面正門の眞上に掲げられた大理石の大看板、それには『京城郵便局』と五文字が筆太に彫まれてゐる。書者は、故寺内伯で朝鮮總督時代の執筆であると聞く。伯は惡筆であるとは、豫て聞いてゐたところであるが、今、見れば威程器用な筆ではない。がよく見ると、争はれないことには一種の風格がある。人格の書である。書は心畫なりとはこの邊の消息を物語るものであらう。

京城中央電話局 これは、同じ建物の裏門に掛つてゐる看板である。筆者は誰れか分らないが、鶴派の癖を多分に藏してゐる。由來遞信系統には、鳴鶴流が根を張つてゐる。京城には、同派の流れを汲む尤なる者に、中西古竹と後藤鶴仙の兩先生があり、共に遞信省系の人であると聞いた。或は、右二先生の内何れかの筆になつたものであるかも知れないと思つて、敬意を表した。

山岸天祐堂 京城では、之れでも先づ立派な部數に屬する看板である。書體は隸書で多少工夫の跡は見える。然し、書そのものには嫌らないところがないでもない。書者海師の落款も、少し下過ぎはしないかと思はれる。海師先生は鮮人書家の第一人者であると聞いてゐるが、それにしては、少し物足りない感がある。少くもこの看板は會心の作ではなからう。或

京 城 雜 筆

は、識書はその得意とするところでないのかも知れない。私は、まだ先生の書は多く見てゐないから先生を評する資格はない者である今は、唯この看板に就ての直感を誌すのみである。

◇ 紙 天佑堂の隣に、紙屋がある。その看板は、楷書で『紙』と一字大書し、その左右に和洋諸帳簿文房具と營業科目を細々と掲げてある。書そのものは可成り書けてゐるに拘らず、この營業科目の爲めに、甚しく美感を損してゐるのは、如何にも惜しい。書者は半古といふ人で、日本半古逸史書と署してある。日本といふ二字が、一寸異様に感じさせられた。

◇ 印章 これは千代田號印舖の看板で、雪竹先生の靈腕に成るものである。その書體から考へて、大分古いものではないかと思ふ。本町筋では先づ見應えのする看板である。恐らく京城で見られる雪竹もの、唯一のものではあるまい乎私は、この店へ名刺の注文をした看板は店の『まねき』である。

◇ 明治屋 千代田號印舖から、明治屋までの間には、大分大商店もあるが、看板には見るべきもの一つもない。三中井呉服店、夏川日の丸兩小間物店の屋根看板は、相當金は掛つてゐるやうに思はれるが、あゝしたものは、どうも美感は乏しい。呉服店や小間物店の看板としては、より美術的なものを欲しく思ふ。大阪屋號あたりのも多少し何んとか趣味あるものにした。東京神田の清水書店に於ける鳴鶴及び雪竹の大看板や、

富山房の屋根に光つてゐた春洞の看板は如何に私を樂しませたものであらうか。一體東京の書籍店には立派な看板が多かつた。話しが少し横道に這入つたが、明治屋の看板は、流石に、相當なものである。書者は誰れか一寸見當がつきかねるが、初期時代の一六のやうな感じのする書風である。書者は誰れであらうと問ふところでない兎に角一寸立ち止らせるだけの力はある。先づ以て一流の看板であらう。

◇ 丸善運動具特約店 こゝはもう二丁目である。森啓商店と言へば運動具、度量衡の商店であるが、其の入口に、この看板が下つてゐる。書者は二川白楊先生である。佐々木信綱博士は、二川相近の逸事を其の著書に詳記してゐるが、それによれば相近は歌人として、また殊に書家としては、二川流創案者として日本書道史に特筆すべき人であるとのことであるが、白楊先生は實に相近の會係に當り、書風も二川流をそのまゝ繼承してゐるのである。一見何事もない俗書のやうであるが、よく見てみると、なか／＼しつかりしたところがある。慾を言へば、まだ若いだけに少し垢抜けのしないところがあつた。が然し、京城では一流に屬する人であつた。先頃郷里福岡に去つて悠々筆硯に親んでゐるとか切に自軍を祈る。

◇ 青々園 これは又珍らしい丸い看板である。而かも白地に塗り潰した上へ青色に草書で揮毫した凝つた物である。店は風雅な葉茶屋で、窓飾りにも茶味を出す爲め短冊などの小品が並べてあり店と看板とをシツクリ調和させる爲めに工夫した店主の努力は買つてやらない。然し、こゝした試みは、ともすると俗悪に流れ易い恐れがある。書者は矩堂居士としてゐるがいはゆる書家の専門眼を以て見たら、随分難かあらうも知れぬ。落款の位置にも可成り骨を折つたらしい。また冠肩印を押してないのも一つの工夫らしいが、この場合少し形の變つたものをあしらつておいた方が、更に引立つたと思ふが如何に。

◇ ダリヤ これは間口の狭い饅頭屋の大看板で、心齋書としてあるこの店が、ペンキの看板を揚げなかつたことを、馬鹿に喜しく思ふ店先ではホカ／＼と饅頭から暖かそうに息が揚つてゐる。饅頭と看板を等分に眺めながら通り抜ける

◇ 石川物産商會 屋根と軒に同じ文句の看板が二枚掛つてゐる。私は、屋根のより暗い軒に掛つてゐるものの方が好きである。急いで通る者には眼にも止らないやうな地味なものではあるが、一寸人を喰つたやうな書風に面白味を感じ。筆者は誰れか分らない。

◇ 朝鮮館 これは／＼、エライ物があつた。浦島太郎の繪巻物を見る龍宮のやうな建物である。東京の博覽會で見た朝鮮館とは少し趣きが違ふやうな感じがする。朝鮮趣味を現す爲めであらうが、妙な極彩色の看板が幾つも掛つてゐる。然し、俗悪といふ批評は免れなからう。私は眼をそむけて通つた。

結 婚 式 に

—東京に赴くの記—

朝鮮銀行 飯 泉 幹 太

【一六】

なのは船に乗り婦人などを働はせ
爲めて此んな慈善の事はないと思
ふからである

◇下之關の詰問

下の關棧橋をヨロ／＼歩いて居ると、不意に『オーイ』と云つて僕の洋服を引張つた先生があつた。僕は何んだか判らないが、多分左側通行の注意だらうと早合點して左側に行く、更に『オーイ』と怒鳴つた。ビックリして其の方を向くと、『煙草を持てるだらう』とヤミカラ棒の柄柄な挨拶。僕は少なからず癪に障り『君は誰か煙草は確かに持つて居るが、無暗には見せられない、役人なら役人らしく證據を出してから御調べなさい』とたしなめた。先生いやな顔して、首に釣つてあつた鑑札を一寸出して直ぐ引ッ込めた。僕は意地悪くも近眼鏡をはづし判らないから、もう一度見せていだき、たいと云ふて二度出さして、検査済の煙草を見せてやつた。ユンナ誤多／＼してる間に船客はドシンドシ停車場に過ぎ去つた。先生もい／＼しても仕方がない、僅か僕一人しか検査が出来なかつたのは笑止だつた。後で考えると『ゴルフ』の『半ズボン』に鬼の耳掻き見たいな『クラブ』を擔ぎ、おまけに両手に『ケース』を掲げた、恰好が如何にも怪しかつたので第一に眼が付いたのだらうと獨り苦笑した。

◇支那豪傑の怪癖

山陽ホテルで丸山鮮銀支配人と喫茶してると、多くの新聞記者に取り捲かれて、早稲字張作霖、孫文を自分の手下の如く氣焰を上げてる先生があつた。而して何と云つても呉が支那の天下を掌握するだらうと断定し無暗に自分の偉さを

◇僕と記者諸君
今度の旅行は三女の結婚式を東京で擧げると、自分が學校を出てから二十餘年俸給生活をして居るが、未だ曾て自分の用で休んだ事がないので、其の骨休めに、朝鮮で習つた好きな『ゴルフ』を内地の檜舞臺で試めたいのが目的であつた。

丁度出發の前日記者室に顔を出すと、娘さんの結婚も結構だが、あなたの再婚はドウなりましたかとの話。僕はスカサチ實は以前から其の考へを持たない譯でもない、又候補者もないではない、がヨイ年をして今更ら吹聴するのも氣耻かしく、おまけに曩に終世子氏の爲めに再婚せぬと聲明したので躊躇して居るのだ。其の候補者の内には亡妻と師弟の關係ある帝劇花形女優の周旋で同座第一期卒業の老女優もある、今は劇壇から退いて居る四十の姥櫻だか、藝術家には珍しい氣立のやさしい子供好きの方だと媒介者は馬鹿に讃めて居る。場合によつては今度見合ひもし、舊婚旅行をして歸るかも知れぬと答えた。一同は手を拍つて奢れ／＼と騒ぎ出した。處が十月八日の新聞を見るとドレもコレも娘の結婚用で東上云々と書いてあるが、僕の再婚の事はチツドも書いてない。流石は新聞記者だ、騙された振りをして騙されぬと馬鹿に感心しつつ其の朝讀つた。

◇連絡船大シケ

朝鮮の警報を新聞で知りつゝ其の晩連絡船に乗り込んだ。處か船員達は今晚は大シケだと騒いで居つた。事務長は誰彼の差別なく妊婦と見れば御體に障るからと親切を楯に下船を強要した。此間隨分悲劇も演ぜられた。税關監吏の意地悪さへ検査をソ／＼に済まして室に逃げ込むと云ふ有様。實に此の瞬間一種異様の感に打たれたが其のクセ釜山は無風快晴なので、僕は大量装の事を云ふ奴等だと私に憤慨した。僕は出帆間も無く『パー』に出懸けて『ウキス、ソード』を三杯引ッ懸けてよい氣持で寢て居ると、案の條大暴風雨船は木の葉の如く前後左右の動搖甚だしいので、直ぐ眼が醒めた。荷物の轉がる音、船客の呻聲、實に凄愴たる光景だつた。是より先き僕は同室の若夫婦に持ち合せの『シユウ、シツクレムデー』と云ふ船業藥を與へたので僕の室は至極平靜だつた。而して僕は例の如く寢言を連發してる裡に下關に著いた。同室の若夫婦から御蔭様でと鄭重に禮を述べられたのは嬉しかつた。僕が此藥を旅中持ち廻は

吹聴して居った。其の薄ッペラサ加減實に齒の浮く謀だが、之を尤もらしく聴いて居る記者先生の心中實に同情に堪えなかつた。何と云ふ支那ゴロだか聞かなかつた。

◇出合頭にお面一本

九日夕神戸に著いた。先きに來て居た三女が迎へてくれた。而して僕の姿を見ると『お父さん、今度の御旅行は私の結婚が一分で』『ゴルフ』修業が九分だと壽々枝さん(四女)から申して参りました。と眞ッ向から浴びせかけられた。ズボンを押されてギョットした。『遺産なき父の財産は實に健康の外何物もない』『ゴルフ』は年寄の健康には最もよい運動だ、『ゴルフ』は身震ひする程嫌ひだが、健康には代えられない、御前達の爲めにいや／＼ながらやるのだ、誤解せぬ様に氣をつけよ』と説明したが直ぐ笑殺されてしまつた。親を見る子に如かずとつく／＼感心した。

阪神三日間の滞在は實に忙がしかつた。初孫の愛撫、親類訪問、嫁入仕度の買物などうるさかつた如何に飯桌式を標榜しても嫁にやる方には弱味がある、夫れに必要なものは必要だから買はない譯には行かぬ。之れで三人目の嫁入だが僕の資産は今や實に『シャイネ、ストック』に陥つた。別けて婦人の買物のお伴と來ては十錢の物にも十分も二十分も懸かるのだから堪らない。此んな時妻が生きて居たらと、つく／＼亡妻を追想した世の中に妻ある先生が其の幸福を知らずに我儘勝手な事をするのは實に耐當りの極だと思つた。

◇花婿との初對面

十三日の正午、東京に著くと長女が迎ひに來て居た。東京では長女

が何にもかも世話してくれたので一息つく事が出來た。夫れでも残りの買物で諸所に引張り廻はされた。脚が棒の様になつて毎晩按摩をとつた。

婿は娘も僕も寫眞丈でマダ一度も見た事がない。式前に一度會つて置くのが互の爲めだと考え、其意を媒酌人に通じた。十四日朝婿さん平氣で何に訪ねて來た。北海道から昨朝著いたとの挨拶。チツトも術氣などなく技術家としては珍らしい常識に富んだ若い工學士だつた。一見其の氣持よき態度に娘よりか僕の方が先きに氣に入つてしまつた。娘は僕と婿との顔を見比べて安心した様子だつた。實は今春婚約が済むと互に文通する事を許して置いたので、兩人は一言二言交はす裡に舊知の様に打解けた。之れから婿と長女三女と上野精養軒に出懸け、午餐を共にし四方山の話交換し紀念の撮影までした。

◇結婚式の當日

十五日は式の當日で朝から髪結や美容館の先生がやつて來たので僕は別室に幽閉を申付けられた。夫れでも何んだか氣に懸かるので時々室に還ると直ぐ追返された。おつくりが出來たとの知らせに室に駈け入ると馬鹿に奇麗にお嫁さんになつて居たので、思はずアステキと大聲を出して美容館の先生や宿の女主人に笑はれた。三時神田明神の『バラック』で式を擧げた。神官の誓詞などサツパリ判らない。只『朝鮮銀行に事仕へる飯泉幹太の娘の喜美子』云々と云ふ丈け判つた。馬鹿氣た儀式だと思つた。後で新夫婦に聴いて見たら矢張り僕と同意見だつた。五時半から親類丈けで晚餐を共に

し、エツクリ打解けた話をして樂しかつた。僕は所謂披露宴など親類ソツチ抜けのお客を主とする而かも何等深い縁故のない富豪知名の士を只徒らに網羅する事が大嫌ひ丁度先方が僕と同意見なので所謂披露宴なるものを廢したのであつた。

◇父としての感慨

總ての式を終り、長女夫婦と旅館に歸ると今迄張りつめた元氣が抜けたのかペラポーに疲勞を感じた這んな事ではアト二人の娘を結婚さすとドンナに『ゴルフ』をやつても長生きは出來ないだらうとまでヘコタれた。が然しコウなれば最早や僕の天下明日からは『ゴルフ』修業自由勝手だと考直すと馬鹿に元氣が出て直ぐ明日からの『プログラム』を作り始めた。

◇中村氏新曲

吉田 莊 一

京取中村樹園さんが鏡前琵琶作曲者として相當地歩を占めて居る人であることは、改めて説明するまでもなからう▲氏は近年思想善導といふ立場から皇室中心主義の作曲に精魂を打込んで居る▲第一編は『和氣清麿』、第二編は本號所掲『豊太閤』、これは先日旭會全國大會(神戸)に、橋旭翁師が自ら彈奏した▲處で中村氏に依ると篇中『秀吉ムック』と起ち上り、やよ待て承兌』といふ處と、次の『冊書を之れへ』といふ文句の間に、更に秀吉の意氣を表現する適當の文句が欲しい、これは自分の力にあまるから敢て世間博雅の士の御示教を仰ぎたい——と言つて居る。

半 畫 壇 雜 話

京城日報繪畫部

多 田 毅 三

京城の畫壇は仲々に多士濟々で有望此の上も無いことでありますが最も私の不満とする處は何うも是等多數の有望なる畫家諸君の心の生活が豊かでないことです。(と云ふと直ぐ、お前より貧しいと云ふのかと怒る人もありますが私は何うでもよいとして下さい)これはお互に餘りに飯を食ふことの競争に疲れてゐるのではないかも思はれます。食ふ方のことなら皆、驚くべき才智を持つてゐられるやうです。殊に畫壇に名を爲してゐる古い人程々とも云えませう然し、此の世智辛い世の中に此の位の處世上の技巧は先づ必要と認めめる事とするならば、藝術家の心の生活は猶一層世智辛くなくてはならぬ筈であると思ひます。藝術家はそれに依つて價付けられるのですから、曾つて(それも七八年前の事ですが)東京の下谷だけでも名の知れた畫家が二千人以上居ると云ふとでした。二千人の畫家は必ずしも親の残した財産ではかり食つてゐるとは信じられませんが、必ず生活の競争をしてゐるのだからと思ひます。さうするとその人の藝術に量と光輝とを與へてくれるその心の價値の競争を主眼とされてゐる筈ですが、處が世の中は仲々に善く出来たもので、繪の下手な者は賣ることが上手で

あり、繪の上手な者は何うもその人を支配してゐる高潔さや、肉體的な無性さの爲めに賣ることが下手と來ます、それで名譽は持つてゐるが金は持つてゐないと云ふ、今流行りの型を見せてゐるので

扱てそれなら、藝術家として何れが使命に添ふかと云へば勿論後者を擇まなければなりません、他の事で儲ける方法を知らないのなら繪を書いて儲けられるのも致方の無い話ですが、然し、自分で繪を描いてその上にそれを賣つて廻つて儲けると云ふ位のし、たまな才智の所有者ならば人の作つたものを單に賣つて廻れば一層力の經濟で本町邊に門構えの一軒も建てることは朝飯前だらうと思ひます。

先づ私もこんな駄辯を弄んでゐる暇に繪の一枚も描けば善いのです。世の中には大本教を信じる餘裕の有る人もあるのですから、こんなことを云ふのも一種有効な無駄の一つとして猶儲けるとしまして半島の畫壇は實に日進月歩と云ふ有様で一つの展覽會、一つの講演會、一部の雜誌の發刊と共に多くの人が知識の一段を踏み進めてゐることが認められますが、京城では未だ思想的な論戰がありませんよく新聞社同志の喧嘩もあるやうですが、あれが何うした 彼奴が

斯う云つた式で膝の一つも打て感心出來るやうな言葉も所謂御高稱も拜見出來ぬやうです。自由教育問題等も大分湧き返りましたが自由教育の眞體は恰度鎮守祭りの夜のお月様みたいに、高い處で下界の騒ぎに無表情でゐたのではないかと思ひます、それは始からお月様とは無關係だつたのですからお月様には何の関えもありませんやね(處で私もそのお月様には手が届いてゐない様ですが)さてその中の自由畫壇か、大の男が髪を長くして人並外れた好みの洋服まで著込んでさうして弄ぶ繪に於てさえもその眞體には觸れられてゐないのです、いや如何なるものを描くのが畫家であるかさえ考えられてゐない場合が多いのです、だも自由畫に對する教員が素人で眞の批判と指導とを誤るとは有り得べきことであると思ひます。一方半島には未だすつきりした詩人を持ちません。(一二の人はあるが)それだけに半島の生活は過渡期であることが思はれます、さうして事務的で現實的です、従つて畫家達にまで此の一番逆な現象が充ちてゐるのです。郷土の味は必ず心が主です、心は郷土の影響を素直に受けてゐます。内地や外國の技法を移植しても一度では内地と同じ果は結ぶまいと思ひます。吾々は各々魂を持つてゐます、その魂こそは此の世に二つと同じものゝ無い尊いものであります。之を表現させ出来れば世界中の者が皆繪を描いた處で大才夫です。世界中の人が皆地圖屋に成るのは大變な運ひです。自分の生命の價を知るとは大分困難な事です。自分位慰められてゐるとはありません

位慰められてゐるとはありません

他人の技巧は他人を生かしてゐるのです、私達は正直に自分を生かす爲めに自分の技巧を發案しなければなりません。大儀でもそれをやらなければ繪なんでものはこんな不景氣の時には全滅しても善い筈です。處が人間はいくら不景氣でも神は信する、細君に坊主になるが經濟だと強ふる人も居ない、

不景氣になつたからつて山が汚く見え始めたと言ふ人も無いやうです、要するに吾々の魂には不變に物を愛し得る尊いものが有りますその中で仕事を續けてゐる畫家は人間と共に遠水だと云えませう、如何です皆さん、(人のことを悪く云つてゐる間は自分が偉いやうな心算で私にゐるのぢやない)。

詩學古事抄錄

古 城 梅 溪

松本兄足下——足下が發行する所の京城雜筆は諸家の名筆高説を網羅せられ、愈々出でて愈々妙にして吾輩愛讀者は敬服するの外無之候。然るに別稿は稍裕外の嫌ひあるに似たりと雖も未だ此種の記載なきは我等吟社同好者としては幾分物足らぬ感も致し紙面の淋しきやに存じ候に付、乍潜越御寄贈申上候間御一覽可被下候、尤も是れは單に近耳狎口の字句を採擇せしに止まり、大方識者の劉覽を汚すに足らざるは固より論を待たず、唯初學參考の萬分一に供するを得ば幸甚に堪へず候、但し全稿に涉り難字同字の夥多なる爲め印刷上頗る困難歟と存せられ候殊に杜撰の虞れ有之候間御遠慮なく御取捨可被下候、萬一取るべき者あると爲し御掲載の榮を得ば尚ほ十數回を重ね寄稿致し度と存候間御含み可被下候也直々拜白

周の季耳、字は伯陽、謚して聃と云ふ、柱下の史なり周の衰ふるを見て遂に去つて『函谷關』に至る令尹喜先づ其の東し紫氣あるを見て眞人の當に過ぐべきを知り物色を候ふて而して之を求む、果して老子の青牛に騎り過ぐるを見る、道德經を授けて而して去る(史記に見ゆ)。

關門令尹誰能識(崔巖)、東來紫氣滿函關(杜子美)、人占仙氣來(張九齡)、關中紫氣迎(宋璟)人在函關先望氣(胡宿)、望氣竟能知老子(同)、青牛不復返空誦五千言(何景明)、已道天風吹紫氣、爲余相送過函關(張佳胤)、紫氣常從西極來(吳明卿)、一片嵩雲逐君去、何人不道函關紫(同)、書成紫氣即函關(同)、中原紫氣度江來(王元美)、猶龍紫氣將西度(同)、一自著書西度後、關門紫氣至今寒(同)、天門紫氣望逾新(徐中行)、望氣久勞關令尹(同)、關門方軌來眞氣(同)、關門紫氣望燕滿、西來紫氣屬長安

(同)關門紫氣擁青牛(李化龍)

桂 劍

吳の延陵季札徐君を過ぐる、徐君季札が劍を好むも口敢へて言はず季札心に之を知るも上國に使用する爲めに未だ獻せず、還るさに徐に至る、徐君已に死す、是に於て乃ち其劍を解いて之を徐君の家園に懸けて而して去る(史記に見ゆ)。

把劍覓徐君(杜甫)、我有延陵劍(李白)、獨挂延陵劍(同)、月迥延陵劍(于鱗)、夙昔銜杯客、今來掛劍誰(同)、夢裡聞天掛劍歸(同)欲掛延陵劍、風雷不可攀(同)、當時季子寓、即是徐君心(揭基)、掛劍果何益、聊以明不欺(同)、季子劍齒悲異日(梁有譽)、寧知挂劍處(中行)、腰間笑解延陵劍(盧櫛)、欲擬延陵劍聊歌歎折篇(化龍)一自延陵掛劍去、干今冢樹動秋風(許邦才)徐君如有意、對劍慚延陵(孟浩然)

◆甲本氏の話

平 田 久 雄

朝鮮火災の甲本さんは、あれこそ鍊達灌能とか、老鍊圓熟とかいふ部類の人であらう▲『保険も勿論宣傳といふことが必要——處で、昔の人間も可なり巧妙な宣傳はやつて居ますね、例へば死んだ鰻をハカスために土用の丑の日に鰻を食へば……と云ひふらす、又くだんが生れると、疫病除けにあつきと何とかを食へといふ……みんな穀物屋の皮肉な宣傳だ——』と斯うして甲本さんの宣傳學の研究はなか／＼深奥なもんだ。

函 關

養女の話

京城覆審法院 伊藤憲郎

1105

我が國古來の淳風美俗を冒瀆するからである。別に親種を振廻さんでも商買は出来やうでないか、指南料とか違約損害金とかいふ様な過重な制裁を設けて、女をして強て稼業を繼續せしめないことである、藝妓に付てそれは單に藝を賣ると云ふ純な業務と觀念しても悪いと謂はねばならぬ。

抱主は他人の娘を養女として己が籍に入れ之に藝妓稼業を爲さしめる、然らば戸籍上は立派に人間の親であるから親が娘に、時として醜業を強いる不埒なことになるのだが、世間では石ころが往來にあるのを怪しむものがないやうに一人として人倫を亂すなどと謂ふものはない、昔から子は親に孝行しなければならぬと云ふ教はあるが親は子を食ふては不可ぬと云ふ教がないからか？

人身賣買であるのとキツイ御達しであるのであるが、それから五十年になると云ふ今日、社會の實情は御存知の通りである。扱て法律と云ふものは威力のないものであることよ。

○ 子は親に食はるゝものと、諦らめて、撥だこの手に札を數へると云ふ俗語がある、新しい婦人に云はせたら、それこそ我れを侮辱するものであると怒るであらう然し義務本位を高調するフランスのデギューにも問合せたら、それこそ日本武士道であると讚美するかも知れぬ。それはそれとして藝妓娼妓の中に割合に純真な親孝行夫孝行——クラシカルな女のゐることを紳士諸君は認めると云ふことである。彼等は牛馬であること一蹴することはならぬ。

新聞と記者

吉田 莊一

『……一、人身を賣買するは古來の制禁の所、年期奉公等種々の名目を以て其實賣買同様の所業に至るに付、娼妓藝妓等雇入の資本金は、贓金と看做す、故に右より苦情を唱ふる者は、取札の上其金の全額を可取揚事。一、同上の娼妓藝妓は、人身の權利を失ふ者にて牛馬に異ならず、人より牛馬に物の返済を求むるの理なし、故に従來同上の娼妓藝妓へ借す所の金銀並に賣掛滞金等は一切償ふべからざる事。一、人の子女を金錢上より養女の名目に爲し、娼妓藝妓の所業を爲さしむる者は其實際上則ち人身賣買に付、従前今後可及嚴重所置の事』……之れは明治五十年十月九日司法省第三二號達である娼妓藝妓は牛馬なれば返済の義務がない、稼業の爲めの養女縁組は

有馬日日は、今ではスツカリ經營者になつて了つて、文章などは之れツばかりも書かない▲が七八年前は盛んに人物論を行ひ、しかもそれが犀利瑰麗、だといふので、大評判になつたものだ▲朝鮮公論などはあれで賣出したんだ▲易水が筆を捨てたのは、何としても寂しい▲さういへばその當時角田(京日)君などは、歌人として鳴らした▲そして随分いゝ歌を詠んだ▲この人なども今は政治記者だが——素質からいへば、惜みても尙ほ餘りある人といへやう▲石森君なども餘り硬化しないがよからう▲京日の經濟部長として花々しい活動をした中島司君——現殖銀調查役が、再び操觚界に復活するといふ噂がある▲但し眞偽は知らぬ

○ みんな目前になつてフリー、ラブの世界にするもよからうが、それは夢想であらう、抱主が親になつて戸籍上子である者に醜行を強いる、その如きは絶対に廢めたい

筑前 豊太閤 琵琶

— 新作皇座中心主義琵琶歌 —

京城現物取引市場 中村 櫛園

發しては萬架の櫻と匂ひ。凝つては百練の鐵と輝く。精氣鍾まる神州に。千古の偉人ぞ出でにける。扱ても豊臣の朝臣秀吉は。尾張の國の微賤に興り。麻と亂れし戰國の。六十餘州を平定して。上皇室を尊崇し。下は四民を撫育して。海内靜謐に歸しければ。支那朝鮮をも従へんと。自ら肥前名古屋に出陣して。軍兵を釜山浦にぞ進めける。勇みに勇む將卒は。破竹の勢凌まじく。一氣に玉城を陥れ長鞭騎して鐵蹄輕く。平安成鏡の地を略し。早くも支那地に攻め入らんず有様に。明國の上下震駭し援軍數萬を差送り。防戦なく力めしも。いかでか我精銳に敵すべき。わけてや隆景宗茂等が。蹄にかけて蹴散らせし。碧蹄館の塵殺に。明王大におぢ怖れ。講和の使節を遣はしける。時しも慶長元年九月朔日。大阪城の大廣間には徳川内大臣家康。前田大納言利家を始とし。諸將威儀を正して居並べば。正使楊方享未座に控へ。副使沈惟敬其の後に畏る。やがて警蹕の聲嚴かに。爵金緞子の幅餅かせ。數多の近侍隨へて。秀吉靜々と立出で給へば。群臣齊しく叩頭きける。其莊嚴にやうたれけむ兩使はハッド平伏して。金印冠服捧げつゝ。匍匐ひ廻るぞ笑止なる。秀吉微笑を湛へつゝ。『明國

の使節大儀なるぞ』と。いと懇ろに勞へど。言葉通ぜぬ兩人は。必定巳を責むるものと。戦き感ふ見苦しさに。小西行長堪り兼ね。『明國の使節殿下の御前なるぞ。謹み畏み拜跪の禮を。行ひ然るべし』と通ぜしかば。兩使は稍く安堵して。畏るく捧持せし金印冠服をぞ奪る。やがて謁見の儀を畢りければ。秀吉之を別座に招じ。厚き饗應をぞ爲したりける。善美を盡す山海の。珍膳嘉肴は堆く。花も羞らふ小姓等が。すゝむる美祿に舌鼓。うつや樂師の大鼓。あひに交ゆる小鼓や。太鼓に合する笛の音の。拍子も序より破に入りて。舞ひ納めたる濃城樂。目出度終りを告げしかば。兩使は悦に入りてぞ見えにける。斯くて翌くる二日の己の上刻。冊書捧呈の事あるにぞ。秀吉はかねて使節の捧げたる。紅燃ゆる緋衣を著け。金冠嚴に戴きつ。いと儼然と座に就けば。諸將左右に居流れて。兩使は末座に畏まる。冊書披露の役は。僧の承兌承はり。恭しく進み出で音吐朗々讀み行けば。文辭不遜を極むるにぞ。一同不審の眉をひそめしが。茲「特封」爾為「日本國王」。と一際高く讀上ぐれば。秀吉ムツクと起ち上り。やよ侍て承兌。冊書を是へと鷹掴み。あはやと見るまに引裂いて。兩使をハッ

タとらみ据え。オノレ夷狄の分際として。我を日本國王に。封すと云ふは、咄、何事ぞ。我神國は畏くも。天地開闢以來。萬世一系の聖天子。天壤無窮に治しめす。國體なるを知らざるか。我若し日本に王たらば。惡逆無道の臣たるべし。鞞威のたはごと。聞くだも耳のけがれなりと。著けたる衣冠かなぐり捨て。足蹴にかけて踏みにじり。我武を恐れぬ鳴濤の沙汰獅子のあざとを弄ぶ。狗鼠の振舞傍痛し。疾く歸つて汝が王に此の旨傳と傳へよと。梁震動が怒の音聲。聞くより兩使は慙伏し耳を蔽ふてわななきつ。逃くるが如く退りけり。やがて秀吉諸將に命じ。再び軍を進めしも。皇天終に年をかさず。雄圖半ばに疾にて阿彌陀ヶ峯に眠りしは。いとも遺憾の極みなり。嗚呼秀吉の此の偉業。不幸中道にして絶えしかど。武を海外に輝かし。國威を四方に振ひたる。其勳功は永久に。青史の上をかざるなり。青史の上をかざるなり。

寄稿家の顔

平田 久雄

加藤松林君が、十月號に永樂町人の似顔を書いた。これは町人を手初めに、あらゆる寄稿家を書いて行かう目論見だつたのだ。それで十一月號には森(殖銀)さんか寺尾さんを書き手筈でゐたところ寺尾さんは旅行する——森さんは書いて見たが、筆者も満足せず、當方でも『どうも顔がキツ過ぎる』と思つて中止。この十二月號に改めてやる計畫をしてゐるが、今度は肝腎の加藤君が旅行する——と、變な事になつて了つた。

總督記者室から

朝鮮新聞政治部長 久松前平

(三三)

總督府の記者室は、近頃如何なる模様かとお尋ねに對してお答へすることにします。

◇總督府の記者室、それはく大騒動、大混雜を極めて居ると云ふことが全部です、普通でも可なり入釜しい所に持つて来て、例の行財兩整理を斷行すると云ふ頃なものですから大變なものです。

◇しかし、新聞記者の多忙な時は沈黙して居るのです、眼がクルクル廻つて、兩耳がピク／＼動いて居る外には混雜を見出すことは出来ぬのです、碁を圍む人、將棋をさす者、新聞や書籍を見る人、それが記者室のスケッチ其儘です。

◇總督府の豫算は下岡政務總監の歸任によつて大體は明かになつて居りましたが、草間財務局長が歸任したので、外廓だけは判明しました、即ち十三年度の追加豫算として早害救済費四百萬圓の借入れをする、十四年度は經常費で一千五百萬圓、繼續事業で一千萬圓、合計二千五百萬圓の整理緊縮をやること確定したのであります。

◇十三年度の實行豫算總額が一億四千餘萬圓であります、それから假に明年度の整理額二千五百萬圓を引いて見ますと、一億千五百萬圓になります、所が明年度の總豫算額は實に一億七千萬餘圓に達して居ります、一寸考へて見ても、行財兩政整理を政綱として立つた

現關の容認しきうな筈は無いと思ふ程に總督府の豫算が斯くも膨脹したのは當り前ではありませんか。

◇一億七千餘萬圓の使ひ途に就ては詳しく申上ぐるとすれば、中々長くかゝりますから簡單にすることゝしますが、明年四月一日から滿鐵に移管してある朝鮮の國有鐵道が六年前の通りに總督府直營になるので約四千萬圓の豫算が總督府の豫算に編入されるのです、之れを差引いても一億三千萬圓ですから二千五百萬圓の整理をして今年度の豫算と大差は無いと云ふことになつて居ります。

◇母國の豫算も各殖民地の豫算も總額から申しますれば明年度は、ウソト減少されてあるのに獨り朝鮮のみが大増額をされてあることが分かります、そこを我々朝鮮に在住して居る者としても大に考へて見なければなりません。

◇話は一ヶ月前のことに逆戻りせねばなりません、それは下岡政務總監が豫算に就て中央政府の諒解を求む可く草間財務局長、林司計課長を隨へて東上してからのことになつて居ります、其時分には下岡政務總監は「整理緊縮は徹底的にやる然し産業第一主義で進む」と聲明したわけですから。

◇現在ではへも朝鮮の經財界は二ツチも三ツチも行けぬのに、大世

帯の總督府豫算が整理節約されることになると、朝鮮の事業界も上がつたりだ、折角芽ざした朝鮮の發展も停頓せなければならぬ、如何になり行くものかと一般が憂慮したのです、そこで民間代表として渡邊京城商業會議所會頭が上京して朝鮮の實狀を要路に訴へるやら、其他言論機關或は民間團體等でも大騒ぎをして心配した様な次第であつたのです。

◇下岡政務總監は著京勿々憲政會事務所に於て「朝鮮は二千五百萬圓の整理を斷行する」と發表しました、總督府出入の記者諸君は「我々が想像して居つた通りだつた、なぞ大威張でしたが、其の實正確に二千五百萬圓の整理額と云ふのは初耳だつたのです、それからと云ふものは、記者室は修羅場です、一刻も早く、成る可く詳細に最も正確に其内容を讀者に報導せなければならぬ任務を持つて居る記者諸君の苦心は、なみ大抵のことでは無いのです。

◇總督府に出入して居る記者諸君は政治部にせよ社會部にせよ經濟部にせよ其他各專部門にせよ何れも粹を集められて居るのだと云はれて居るし、記者諸君自らも天下の新聞記者を以つて任じて居る人が多い様でありますから、南山の麓に天狗さんが寄り集つた様に、一口にも筆にも甲論乙駁賑やかなのですが、豫算の様な數字に至つては見るか聞くかしなければ正確を期することは出来ぬのです、それを皆が皆、自分一人で眞先きに正確に報導しやうとかかるのですから、眼と耳の競争に火花を散らすと云ふ騒ぎなのです。

◇所が東電は「殖民地補給金全廢若くは大削減」「新規事業一切認

めぬ』などと悲觀材料許りです、
そして政務總監の動靜は一つも分
からぬと云ふ始末、突如『下岡政
務總監は朝鮮關係の知名の士で東
京に居る人々を懲罰して大阪に下
り同地一流の實業家を招待して盛
宴を張つた』との入電に接して、
決して感服なんかしない記者諸君
が『下岡くんはエライ』と云ひ出
した、それは『朝鮮の統治は金子
だ』と何時も齊藤總督から聞かさ
れて居るからであらうが、記者
室の『朝鮮統治論』が何時も經費
の問題で行き詰り、それ許りは一
致點であるものだから、思ふ處に
拵つたと云ふ譯であります。

◇愈々下岡政務總監や草間財務局
長が歸任すると前述の豫算の使途
に話かなるが、二千五百萬圓の整
理はするが一千五百萬圓の補給金
と一千萬圓の借入金とが出来た許
りで無く豫算關係の事業資金三千
萬圓餘の調達も出来たから、明年
度は整理はするが治山、治水、水
利、灌溉、港灣、道路、鐵道其他
等朝鮮の産業開發進展に伴ふ施設
は、**ドン、**進められ得ることにな
つたのであります。

◇記者諸君が押し掛けて『實に大
成功でした、感謝します』と自分
等の懷具合でも良くなつた時の様
に思ひ切つた贅辭を呈すると下岡
政務總監は『イヤ満足することは
出来ませんが大體總督府の原案通
りに中央政府が容認して呉れまし
た、朝鮮に居る人方は御不満と思
ひますが、マア、十五年度以降
に根本的計畫を樹立して朝鮮の進
展を期し度いと思つて居りますか
ら一般も諒として貰ひ度いもので
す』と何處迄も謙遜の態度に出ら
れて居るのです。

◇エライ人です。へあれば、其論評

する時分に必ず低價だの馬鹿だの
ケンカ、奴だの血の環りの悪い
奴だのと云ふ言葉を浴せて痛快が
つてる記者諸君をして『下岡はエ
ライ』と感服させた丈けでも豫算
關係に於ては下岡政務總監は大成
功だと思ひます。
◇其次は行政整理に依る大鈍の振
ひ具合について、記者室を騒がせ
て居りますが餘り長くなりますか
ら次號に譲ります。(二三、一四
一四)

人事相談所の窓より

京城府人
事相談所 早 田 愛 泉

就業難、失業者は文明社會の病である、職なくて困つ
て居る者必ずしも素質不良者でない、運命と境遇の然
らしむる所も大にあります、職に就かんとして永く職
に就くこと能はぬ者の精神は荒み易い焦り易い、そし
て人世を悲觀する者が多い、吾人は同じ人類にかゝる
者あることを遺憾とし且滿幅の同情を此等の人に寄せ
ざるを得ない、自身安泰の境遇にあるからとて斯かる
者を冷淡に視ることは悪いことである、人には總てか
ゝる人のない様に少い様に盡力する温い人情があつて
欲しい。

公設の職業紹介所を訪ふて職を求むる人の中には大學
の卒業生もあれば元縣會議員をやつた老紳士もある、
亦た中には妙齡の美しい女子もあれば十四五歳の無垢
の好少年もある、決して素質の悪い落伍者許りではあ
りません、然るに世上職業紹介所の門に入る求職者は
水平線以下の人物のみであると悪評する人がある、然
し斯かる人々の奉職して居る會社、官廳、銀行及び商
店には嘗て職業紹介所に職を求めた者が必ずある(實
驗)唯此等の人は他の紹介で其處に就職した者である
から其悪評する人々にはそれが解らぬのである、此惡
評あるが爲めに職業紹介所に出入することを恥ぢ厭ふ
者が澤山ある、抑も官公設の職業紹介所は人間の需給
を圓滑にする行政機關である、文明人が此の政治の機
關を利用する事は毫も憚る所ない筈である、悪評者の
反省を促すため茲に一言を呈する次第である。

乞食の話

京城佛教慈善會

小水眞 二

〔二四〕

晩秋の太陽が、嘆きをくれたコスモスに、弱々しい光を投げかけて居る、薄寒いある日の午後の事であつた。

垢じみた、これでもとは白木綿であつたのかとあやしまれる程、ひどく汚れたチヨクリとパチを穿いて、小さなみすぼらしい風呂敷包を背負つた痛々しいなりをした田舎風の一人の若者が、病舎を訪つて来たのである。

頭の髪は赤く延びて、色艶はなく顔といはず手足といはず、外に露はれて居るところは赤黒い色をして居る。額のあたりはヒカラビて漂泊の色素がハッキリと顯はれて居る。どう見ても今迄永らく炎熱と風雨の間を流浪して来たものであらう。幼い時に火傷でもしたのか右の手首が用をなさぬようになつては居るが、一目見ては不具者には見えぬのである。

二三年前からの不景氣が田舎の偶々迄及んで来たので平和な田舎に居たこの不具の若者も、ついには其日のパンにありつく事すら出来なくなつたのである。彼は都へ行けば食ふ事は大丈夫だろうと考へて京城をさして田舎をあとに出て来たのである。然し漫然やつて来ては見たものの彼が今迄思つて居たような夢の國はなかつた。そうして若者をいたはるのにはあまりに都の人達の生活は苦しいもの

であつた。又彼よりはもつと酷い不具者も多く眼についたのである其時に若者の心に浮んだのが、乞食の志願であつた。

『野良犬さへ食つて生きて居るじやないか、俺は人間だ、食ふ事は何だ、俺には丁度役立たぬ手があるじやないか、之を切りとつて片手になれば立派な乞食になつて食つて行かれぬといふことがあるものか』

街路樹の下や、停留場や、商家の軒端に居る多くの乞食を見た彼はかう決心して、其印可を貰ふために今病舎を尋ねて来たのであつたそうして受付の硝子戸を叩いてブツキラ棒に言つた。

『先生サマ、どうかこの手を切斷して貰いたいで御座います態々田舎から来ましたのですから』。

何でも彼は忠清南道の田川郡の田舎のもので朴裴今といふ二十一歳の若者であつた。

『手を切つて呉れて、どこか痛むのかね』

『いや此の右手が邪魔になるのです』

『手が邪魔になるとはお前は何かしな事をいふな』

『いや、こんなに両手が揃つて乞食をして居ては世間の人々の情を受ける事が出来ませんから』
『そうするとなんだね、お前は

乞食のもつとをせむるつもりで来たのだな』

『ハイ先生、乞食になりたいのです、實はこの手を切つて貰つて(手がなくて働けない憐れなもので御座います)といつて人の門にたち街を流して行けばキツト道行く人々は情をかけてくれます。そうすればどうにかさうにか食つて行けます。このなかりではとても乞食も出来ません食ふ事も出来ませんから』

といつて彼は腕をまくつて見せたが青く膨れあがつて居た。何でも彼の話では或家の前に立つて物を乞ふた所が『此奴め乞食の眞似をしやがつて』といつて酷くぶたれたさうである。そこで手を切つて乞食になるといふ決心が此時よほどつよくなつたものらしい。

『先生、何卒、一人助けると思つて私が乞食をするのに邪魔になるこの手を切つて下さい』
聞いて居る者は可笑しいよりも憐愍な程、彼は一生懸命に懇願するのである。

世の中は様々だ、手がない不具のために食ふ事が出来ぬといつて断げいて居るかと思ふと、この若者のように手がある爲に食ふ事が出来ぬといつて苦しんで居るものもある。

人生の行路に僅に一步を踏み出したばかりのこの若者が無資本の乞食を志願するに至つた——といふことは社會の陰影で、人間の内部にある類人的な性向を遺憾なくあらはして居るのである。又一面から考へて見ると、人間は生きながらには如何なる努力をも惜しまないものである。其れが爲に或時には常軌を逸した手段さへ選ぶ事がある。然しこの何處迄も生きよう

と努むることは拒むことの出来ぬ人間の自性であらう。さりとして生きたが爲めの手段とはいへ乞食を憐むといふことは少しも人生に對しての眞劍さを認むる事が出来ぬたゞ其處にあるものは頼他心と奴隷根性である。

いたが、それを追ひ拂ふ力もなく黄昏の雑踏の街へ物憂い足を運んで行つた。

國旗の觀念

仁川吉留酒造所
支 配 人

結 城 次 郎

今年の秋季皇靈祭には東京の鐵道省で國旗の掲揚を忘れたといふ新聞記事を見たが市井の一小輩のことならいざ知らず苟も一國の官廳が國家の祭日に祝意の表象となるべき國旗の掲揚を忘れ然かも人之を怪まざるに至つては實に意外千萬に思つた。

◇

吾人は徒らに同胞の非を發いて快とする者ではないが苟も東洋の覇者として世界に強を争ふ帝國の臣民が自國の表象となる國旗の觀念に乏しいといふことはほめた話ではあるまい、私は海外に在つたとき西洋諸國民が自國の國旗を尊重すると共に他國の國旗に對しても尊敬の態度を失はなかつたのを見て洵に奥床しく思ふたのである、一國の文化とか國民の教養とかいふものもこんな些細な事柄からその片鱗を窺ふことも出来やう徒らに自己の本能を満足させるばかりが文化人の特色ではない。

◇

國旗の觀念を徹底的に國民の頭に浸み込ませるにはどうしても小學教育から之を行はねばならぬアメリカの小學校では毎朝兒童に國旗を禮拜させ國旗を讚美する歌を歌はしめて國民精神表象の焦點を國旗に集中せしめてゐるといふことであるが以て他山の石となすに足るのであらう。

この頃一人の男が私の所に國旗袋といふものを賣りに來た、大きは九寸に一尺の布製で表面の一つには一年中の國旗掲揚日と之に簡単な解説を記し他の一面には國旗に關する注意が簡単に而かも極めて要領よく書かれてゐる別段其男から宣傳費用を貰つた譯ではないが平生氣のつかぬことがよく書いてあるから一寸之を御紹介する。

國旗に關する注意

- 一、國旗の制式は地色白、日章紅にして横は縦の一と二分一日章は旗面の中心、日章徑は縦の五分三とす(明治三年正月布告第五七號)

二、國旗は濫用すべからず表面記載の掲揚日は勿論官署より通知ありたる日は必ず之を掲ぐべし

三、國旗は成るべく交叉せずして一本高く眞直に立て球と旗と密着せしめ竿頭と旗の上縁との間に間隙なき様掲ぐべし

四、皇室に對し奉り吊意を表する場合は其喪期中(喪期は其都度官内省より告示)上半期は國旗と同じ長さ幅三寸位の黒布を球と旗の上縁の間に附し下半期は國旗の二分一長さの黒布を附す球は喪期中黒布にて包むべし其他の凶禮には半國旗を掲ぐべし

五、半旗は旗竿の長短に準じ凡そ一尺乃至三尺程球と旗とを隔て掲揚すべし

六、一竿に我國旗と外國旗とを連掲すべからず交叉する場合或は左右別々に掲ぐる時は向つて右に自國旗左に外國旗を掲ぐべし

七、國旗は我國體の表現にして我國家の標識なりされば決して之を一種の裝飾物として視るを許さず須らく無上の敬虔心と至大の愛撫心とを以て之を使用すべし

八、國旗は死を以て守るべき者なれば其取扱を最も鄭重にし

◆ 雁 來 紅

松 寺 桂 陵

一本にいろ／＼の色そめなして花にもまさる雉頭かな

て汚損破綻なき様注意し且つ非禮の取扱を爲すべからず

九、國旗は平素此袋に納め清潔なる所に掛け置かるべし
十、我國旗を尊重すると同時に締盟各國の國旗をも尊重せざるべからずされば裝飾等には萬國旗を用ひずして萬國信號旗(廿六旋の彩旗)を用ふべし

理 外 の 理

京城日日新聞社 別府八百吉

【三六】

私は知らない、唯熱心に妻君がその神様にしたのは事實である
 ◎近所の者は笑つてみたやうだ、私は第一に山の神からその話を聞いて一日と死に向つて進むであらう妻君の盲信をあはれんだ、子供の残るのが氣の毒だと思つてゐた。

◎月がかはつてから私は自分の耳を疑ふやうの事を聞き、又現實に見た、夫は妻君の腹中の腫物が減つたやうだからといふので總督府醫院に行つて見た、科長は怪訝な面付きであつた。

『どうしたんだ、腫れが減つちやつたね』あるべき筈でないものをそこに見出したやうな口ぶりであつた、明治町の病院にも行つて見た『おかしいな』醫師は云つた、妻君は驚喜した、飛び上つた、涙を流して神様を讃仰した、そして昨今は至極元氣で家事にいそしんでゐる。

◎これは理外の理といふ言葉で片づけてしまへる事だらうか、果して信仰によつて短時日に面倒な腹中の腫物を拂拭し得べきものだらうか、最初の誤診とすれば念の入つた誤診だが一人や二人の醫師の見立てでない以上ヨモヤそんな事はあるまい、或はその種の腫物でも時日がその膿を除く事があるものであらうか、私はその何れにも疑問を持してゐる。

◎『妾も腹を切られるなんて恐いから、そんなに萬一なつたら神様にすがらう』山の神は云つてゐるそれに對して私は平素の如く『馬鹿が……』と叱り得ずにある、近所の神さん連もさう話し合つてゐるらしい、世の中にはさても不思議の事があるものである(十一月十三日夜)

◎私は不遇と貧困に育ち、現に又不遇と貧困なためか、どうも理性に勝ちすぎると友人にも言はれ、自分でもさう感じる事が多い、従つてよく傳へられる理外の理といふやうな事は頭から馬鹿にし切りマジメな態度で人から説かれたにしても、口先は兎に角何を云つてゐるんだと腹では笑ふのが常である。

◎所が最近私は此の理外の理を見せつけられ、ナルホド世の中には妙な事もあるものだなと首をひねつてゐる、これが間接に私の耳に入つたのなら恐らく氣にも留めないのだらうが、現實を眼前に見ては、フフン……と云ふ譯にいかないのである。

◎前置きが長すぎた、事實はかうである、私の極く近くに前田といふ腕のある職人が住んでゐる、その妻君は三十六七歳で今年の八月頃妊娠したのであつた、普通身體は強く今回は五度目に相當するが十月上旬頃から腹中疼痛を感じるに至つた、そしてどうも下腹部に何か腫物が出来たらしく感じられる、ただならぬ身でもあり、妻君は先づ總督府醫院の婦人科に診察を求めた、科長は仔細に検査した結果子宮外の腫物と診定し、一日も早く腹部を切開して除去せぬと一命に關すると宣告した、妻君は度せる程驚いた、その翌日念のた

めと明治町婦人病院の門を叩いた同一の診定であつた、大手術約一ヶ月の入院といふ結論、妻君はボウ……として涙も出なかつた、更に植村醫院外一ヶ所にも重い足を引ずつた、ドコモ同じやうに手術を急げ生命にかかはると刷つたやうに言はれた。

◎手術料百圓、入院料二百圓位なら敢て調達の出来ぬ家でない、生命にかかはるならば止むを得ぬとし、その家に一種の便宜のある明治町に入院しやうと準備にかかつたのは十月の中旬であつた、然し妻君は夜も碌を眠らずに苦にしてゐた、かかりつけの産婆も亦た入院を同家のために熱心にすすめたやうである、が妻君は何か、……ドウしてか、腹を切らずにすむ工夫があるならば……腹を切るといふ恐ろしい事を遁るる工夫があるならば……と夫れを頻りにあせりつつ求め出したやうである、そこには神佛にすがる外道はないと云ふ事になつたやうだ。

◎或人が来て東西軒町の神様——俗稱さういふさうである——にお願ひして見てはとすすめた、主人も亦すすめたらしい、そこで妻君は十月の末から彼是れ十日間朝までさよりその神様にお参りし出した、いかなる神か、いかなる参りやうか、いかなる志をもつて行くのか、どう云つてお願ひするのか

煙草と朝鮮

專賣局長 青 木 戒 三

朝鮮に於ける煙草の種藝に關し過去より現在に就いて少しく詳述して見ると、朝鮮在來種の起源——

口碑傳説區々なれ共比較的論據正確なりと認めらるゝ——は今を距る三百六十五年前領議政金尙容(號名清晉)の婿張維(號名鶴谷)が奉勅使臣として渡清の節江南に於て始て煙草なるものあるを見之を試喫せるに其風味佳良なりしに依り種子を持歸り自宅庭園に耕作せるが傳來の嚆矢であると、爾來朝鮮に於ける煙草の俗稱並品種は南草、陽草、唐草、東草、倭草、目草、西草、洋草、胡草、檀草、香草、頭長草、柏葉草、牛舌草、毒草、廣草、山草、金剛草、牛尾草、

等或は異名同種のもの或は混種、又は變種のもの等種々あれ共大體其の原種は南草、倭草、西草、胡草の四種類である、名稱より區別すれば香草、毒草は嗜好或は禁煙の尊義、廣草、金剛草、頭長草、牛舌草、檀草等は色澤又は形態上よりの名稱、山草は山野生長の意義より出で、南草、倭草、西草、唐草、胡草等は傳來の地名若くは國名に依り呼稱されたものである

現在の内地種は明治三十八年大邸に於て試作されたるが其の最初で黄色種は明治三十九年京城大和町(當時樂善坊)に苗圃を設けて苗を耕作者に給與し移植を試みたる

が其の嚆矢で、又土耳古種は明治四十四年内地專賣局より『カバラ』種の分與を受け全州に於て試作したるに由來する。

專賣制度實施以前は耕作、製造、販賣各方面共其の從業者は唯營利に汲々とし徒に奇利を占めんことのみ努め耕作方法の改善、製造施設の充實、需用嗜好の向上等の方面には多く意を用ひざるの状態を持續し來りし爲め煙草耕作の進歩發達の遅々たりしは當然のことであつた。

大正十年七月專賣制度實施以後は各方面に涉つて著々順調に進展しつゝあるが昨年(大正十二年度)の成績は次の如くである。

種類	耕作面積	收量
内地種	二、六九、〇〇〇反	四、一六、二二九貫
朝鮮種	五、〇二、〇六一	九、〇、〇六三
黄色種	二、九七、五	四、三、九八
土耳古種	七、八	一、二〇、九
計	八、二三、九	一、七五、八七〇
▲製造方面	種類	數量
口付	一、〇九、九〇〇	(千本)
兩切	二、八四、〇〇〇	(同)
刻	七、七〇、七〇〇	(同)
▲販賣方面(鮮内製品賣渡高)	口付	兩切
	(千本)	(千本)
數量	一、〇九、九〇〇	二、八四、〇〇〇
價格	五、三三、九四四	一〇、八九、七五七
細刻	荒刻	刻
數量	二、八、三九貫	六、〇、五六貫
價格	四、三、三二	二、四七、八六圓
▲販賣機關		

元賣捌入 同上營業所 小賣入 五五人 三八六 五、六〇八人 終に鮮内各地に今尙歌唱さるゝ有名なる俗謡があるが、一寸面白いから左に掲げよ。

煙草よ煙草、東萊蔚山に上陸し我が韓國に渡り來し煙草よ、汝の國は四時暖かに、萬國に優り居るに、何故に夫れを捨て、我が韓國に來りしや、煙草は笑みつゝ答へける、元より邦家は捨てやらす、汝の國に漫遊を、試みに暫く來しのみと、然らば富みたる貴國より、貧しき國に來しよりは、定めし我等に財寶を、惠まん處のことならめ、惠む財寶は黄金か銀か、早く財寶打開き、貧しき我等を救へかし汝の如き懶惰者に、空しく財寶與ふるも、直に消盡し終へむ、携へ來れる此種子を、汝の國に蒔き植えて、而して汝を救ふべし、見よ山の根を耕して、煙草の種子を播き散らさば、晝は暖

◆天民博士 平田久雄

商銀の和田頭取は、文章家として聞へた入だが、銀行屋になつてからは且暮劇忙、連も詩意畫情に悠々神懷を伸べる譯に行かないので、之れ許りはどうも……と嘆息して居るさうだ。

き日に照され、夜は冷き露に濡れて、見る見る中に生ひ立たむさらば上葉と下葉を刈り其の中惡しきは取り撥ね除き、鋭き双物もて截り刻み、自己の真入に一杯と、總角真入に二杯を入れて、菖蒲斑の長煙管にて、石炭の火を起したる、金の大火鉢より、之をば吸ひて試みよ、一服吸はゞ五色の雲は咽喉の邊を舞ひ出でて、霞の如く棚引かむ、更に一服吸ふ時は青龍黃龍躍り出で、御空を奔るに似たるべし

新聞哲學

京城日報社 西村滿藏

〔二八〕

われ／＼が新聞を作る上に於て、最も苦心するのは、編輯の目標を何處に置くかと云ふことである。

一口に讀者と云つても千差萬別である。目標を高くすれば忽ち面白くないと云つて批難され、目標を低くすれば又忽ち低級極まると云つてお目玉を頂戴する。では其の中間を狙へばよいではないかと云ふものもあるが、これが又なかなか六ヶ敷い。編輯の目標を何處へ置く——結局この問題はわれ／＼にとつて永久に盡きせぬ悩みであらう。

讀者の中には、よく自分一人が讀者顔をして、いろ／＼勝手な註文をする人がゐる。例へば講談や小説は下らないから止せといふ類である。成程講談や小説は下らぬものかも知れない、従つて其の人にはその必要がないかも知れぬが、他の大多數の讀者か之を歓迎してゐる以上、いかに下らぬからといつて載せない譯には行かぬ。講談や小説のよしあしは直接販賣部數に影響を來すと云ふ實情である。以ていかに大多數の讀者がこれに興味をつないでゐるか、窺はれるであらう。講談や小説に限らず、その他の記事もすべて同じこと、或る種の讀者には無用なことであるつても、また或る種の讀者には大

に有用なことがあるものだ。下るさか下らぬとかいふことはなかなか一概にはきめられないと思ふ。

伊藤憲郎さんの『法篋秘語』の中に、連帯保證を聯隊歩哨と書いた司法記者がゐるさいふことが記してあつた。間違ひも斯うなると滑稽を通り越して寧ろ情なくなる。こんなのは元より別問題として兎角専門家は術語一つ間違つてゐても八釜しく云ふ。教育家や道德家は『婦人凌辱』『色魔訓導』などの記事は、風教上面白くないから須らく黙殺すべしと開き直る。芝居や活動のフアンは芝居や活動の記事が少いと云つて小言を並べる

その他労働者も資本家も自分達の知識、趣味、思想、利害等によつてそれ／＼勝手氣儘な註文や苦情を持たむ。これを一々眞面目に受入れた日には到底新聞は拵へられぬことになる。そこで今のところかういふ種々雑多な讀者を相手とする新聞としては、これらの註文や苦情を旨くコントロールして讀者の欲するところのものを、多少づゝでも織交せて行くより外道はないやうに思はれる。

新聞を嘘を書くものだと思ふのは『天氣豫報はあたらぬもの』ときめて了ふよりもまだ酷い。けれども残念なことには、天氣豫報はあ

たらぬものと信じてゐる人が少くないやうに、新聞は出たら目を書くものと思つてゐる人が少くないやうだ。今日の社會はそれほど新聞記者を理解し、新聞編輯の實際を理解してゐない。いふまでもなく報導の正確を期する——少くとも間違ひをすくなくしたいといふことは、新聞記者として誰しも心懸けてゐることである。僅か五行十行の雑報でも眞實を確めるためにはどの位苦勞するやらぬ。けれどもニュースである以上報導の機敏といふことも考へなければならぬ。時による縮切間數分を争ふといふとき突陸の間に調査せねばならぬこともある。かうした場合往々にして間違ひを生ずることもあるが、何も好んで出たら目を書き嘘を發表する譯ではない。

間違つた記事が出れば必ず迷惑する人が出て来る。或はそれによつて全く社會的に葬られて了ふ人が

◆ 旅先から 加藤 松林

一昨日公州へはいつて、今日出て來ました。展覽會を延したからです。明後日は群山方面へ立ちます。明日は此處で、郡廳で小展覽會を開くのです。毎日／＼深い霧の朝ばかりつゞきます。日中は無暗に濶かい。(鳥致院にて)

出るかも知れぬ。この事實に對しては、新聞記者は何處までも責任を負はねばならぬ。事情によつては或は自分の首にも關する問題である。業でも食つてゐない限り、じやうだんにも嘘が書けるものかイヤ全くワラひ事ではない。

小鳥を飼ふまで

南大門通り二
朝明舎支配人
石 橋 満

漱石さんの文鳥を讀んでから小鳥を飼つて見たいと思つて居た。飼ふならやはり文鳥が可い。純白な羽、桃色の目、デリケートな足。それになれると人の顔を見れば千代々々と鳴くと云ふ事も氣に入つた。(然し漱石さんの文鳥が本物以上の藝術品だと云ふ事は其時まで氣がつかかなかつた。

それも晩秋初冬殊に小春日和の縁側に日向ボツコしながら千代々々と鳴く聲が聞きたかつた。風雅な石の手洗鉢と眞紅な南天の實の二つ三つ――。

三重吉は十圓の札を金入にしまふと三四日して文鳥と淺草の何とか云ふ名人の作つた籠とを持つて來た。そこで私は文鳥は十圓だときめて居た。

書生時代の十圓は少し過重だつたそれに寄宿舎や下宿屋の二階では世話してくれる人もなし第一文鳥に相濟まないと思つた。其後時には小鳥屋の前に未練の足を止める事もあつたが何時とはなしに漱石の文鳥も鳥屋も忘れられてしまつた。或日Sさんから『小鳥で可愛ものですよ主人の顔を覚えてゐますからね』と話されてから又急に文鳥が飼ひ度くなつた。それに今度は私の子供にもこうした物の親しみと可愛さを教へる事にもなると思つた。

鳥屋の籠には二十羽位の文鳥がゴ

タ／＼して居た。北向の路地のジメ／＼した家の中では如何にも寒むさうだつた。價をきくと八圓。だがどうした物か漱石さんの程美しく見えなかつた。連のYがこれは寒に弱いでせうと云ふ。鳥屋の主人も初めての方なら紅雀などが一番丈夫ですと云つてくれる。私の文鳥は又逃げた。それにこれは今年子だから次第に紅味がまして奇麗になり高い聲がよく鳴きますと云ふ。明日にでも卵を産みそうな事を云ふ。Yもこれになさいとすゝめた。

なる程日數がたつにつれて高い聲がよく鳴き出した。羽の色も次第に紅味をさして來た。瑪瑙の楯で琥珀の彫物をする様な美妙的な音で粟を啄む事もなかつたがよくチ、チ、と高く鳴く。そしてとまり木の間にビヨ／＼と飛ぶ。思出した様に水を飲む。口にふくんで心持ち首を上げるとサラ／＼と一粟の水が流れる。此頃では人が側に立つても驚かない。暖い日は水差の水を頭からかけてやる。一振り振ると水銀の玉がポロリと羽から落ちる。湯上りの美しい體に日を受けて／＼と鳴く。粟と水を入れてやる。夕方になると肩すりよせてとまり木で心地よく目をつむつて居る。

妹の子供が遊びに來たので籠を下してやるとヨチ／＼しながらあららこちらを持つて廻る。其度に鳥は驚いて飛廻る。美しい小羽が一つ二つめける。今度は籠を下に置いてのぞき込む。そしてアバー、アバーと話しかける。ビヨ／＼と逃げ廻る。鳥が如何にも面白そうである。

私も妹も無心に來て見て居ると一羽がヒラリ／＼と續いて一羽――何時の間にか子供か籠の蓋を開けて居る。庭に下りた鳥は低い松の木でチ、と鳴いた。小春日和の空は藍青に澄んで高い(二一、一五)

生字引の話

平田久雄

本町署長の鈴木さんに原稿を頼むと、願舎移轉で、とてもそれ處ぢやないと言ふ――御尤もと頭を掻いて高等の鈴木(銀藏)さんに行く▲『原稿は困りましたね……』と考へて居たが『兎も角も何か書きませう』……で、安心して引退る▲すると、豫定締切日にちやんと一文を送つて來る▲サスが苦勞人と感心する――この鈴木さん本町署にあること十六七年、いはゞ同署のヌシである――生字引だ――モハヤ古いとかなしいとかを超越して一つの名物だ▲尤もそれだけに、この町のこと來たら迎も詳しいいものださうだ▲何町の横町に白犬が何匹、ぶちが何匹、ぶちの親は隣り町の赤と白――マアこれ位に精通したものなさうだ▲丁度警務局の國友さんと同格、先づ畢竟といつた所か――。

繪の道樂

總督府醫院
整形外科

松岡正男

【三〇】

箱をよく人が擔つてゐる、あんな
のがありますか』『ハイ、こち
らに色々あります』——上中下色
々と列べてゐる、どうせやるなら
之れも買つとけと上等のを奮發し
てそれからまだ何か附屬品があつ
たらと云ふとポツピー油、三脚、
畫架は？と聞く、親譲りの二脚が
あるからまあ當分は之で辛抱しよ
う、畫架なんて素人が持つのも生
意氣だ、畫家にでもなつてからの
事だ『チャまあ油だけ頂きます』

『さ、後の始末は蝦蟇口君に任せ
て、さあ揃つた、いよく明日か
らやつて見やうと大急ぎで歸宅』
先づ道具は今夜の中に病院に預け
て置く、さて翌日は早朝から家を
出て昨日の道具を今一度出して見
る、矢つ張り昨日入れた儘でおと
なく這入つてゐる、繪具のチキ
ーブを手にとつていぢつて見た、
レットルの色が今日は一入奇麗に
輝いてゐる、就中線は氣に入つた
そこで一日の勤務が終るとスグ大
急ぎで件の箱を昨日の窓際で開け
て、さてどうしようと思ふ考へな
がらいぢつて見る、緑、黄、赤と
順々に雀の糞位つゝ飛び出す——
それを筆が一ペンになめてしまふ
ア、之ぢやあいかん、も少し〜
と出しては書き、書いては出す、一
時間近くもかゝつてやつと出來
た、豫想以上の出來榮へ、成程之
は便利なものだと、一つには感心
し又一つには得意満面、誰か見て
呉れる人はいかしたら、副室の壁
に懸けて置く、部屋に這入つて來
る人々誰か褒めるかと待つてゐる
と、ドイツもフランスも目の運動
が至つて、ロイ、『A君どうだね
あれは？』『あゝ先生お書きにな
つたんですか、奇麗ですね』『
奇麗だらう』もう宇頂天になつて

僕は幼少の時から大變に繪が好き
であつた、尋常一二年の頃から一
寸隣村へ御使に行く時などよく紙
と鉛筆を携へて行つて、景色でも
よい所があると、路傍に腰を下ろ
して所謂丹青に時を忘れ家に歸つ
てから父や母に叱られたものだ、
高等小學時代以後もやつぱり同様
な氣はあつた、鉛筆畫は勿論水彩
畫も一寸眞似した、時には刷筆畫
とか云ふやうなものも嘴つて見た
然し何といつても生來不器用な僕
の事だ、どうせ上達する筈はない
それかと云つて今更際す氣にもな
らぬ、やつぱり何時迄經つても畫
は好きだ、之が所謂下手の嗜好き
とでも云ふものだらう。

元來僕は描いたものを見ると云ふ
よりも描くと云ふ事其物が好きだ
殊に人爲の遠く及ぶ能はざる大自
然の美を精細に觀察し充分に味は
んとするには畫を書く程都合のよ
いものはなからうと思ふ、斯うい
ふ風だから僕の繪はどれを見ても
理窟ばかりで技は一向に進歩せぬ
たまに大傑作だと信じて人に見せ
るさ何時ものよりはいくらかまし
だ位の事でもいつもガツカリして居
る、にも拘らず好きだから厄介だ

◇
恰度昨年は今頃であつたかと思ふ
手術が濟んでガツカリした體をあ

の溢るゝ様な風呂の中に疲れを洗
ひ、ボカ〜する様な氣分で副室
の窓際に寄つて眺めてゐると、向
ふの丘には敝幼學校の洋館がボブ
ラの並木の蔭にチラホラ見える、
ボブラの梢には黄金の葉が夕日に
キラめいてゐる、あゝ何といふ美
しい自然だ、暫くは恍惚として
見とれてゐる、不圖思ひ浮んだの
は油繪でもやつて見やうといふ氣
持、『善は急げ』と教へられて
居る、そこで早速繪の具を買ひに
出る。——本町一丁目の右側に一
寸した文房具屋がある、僕は油繪
の道具など實際あまり見た事もな
い、生じつかぬ事云つても笑はれ
さうだ、一寸考へた、『油繪の道
具はありますか？』番頭さん、『ハ
イあります』——却々愛嬌がある
『繪の具を少々買ひたいのですが
』『ハイ色は何で御座いますか
こちらに色々ありますが……』と
陳列棚の戸を開く、なる程之れか
小さいものだな、價も大した事は
ないだらう『まあ一通り揃へて呉
れたまへ』……實のところ僕はあ
んなハイカラな繪具の名前なんて
一つも知らぬ、それに一々こつち
に云はされては閉口だから一寸豫
防線を張つたのだ『筆は如何です
』と差出されて見ると、『一本ぢや
物足らぬ、大中小三本位は欲しく
なる』之れも下さい』それから序
の事だ『道具も入れる飽見た様な

しまう、B君が来た『どうだね君？』『あゝ君描いたのか、偉いものを始めよつたな、一體どこだね』と尋ねる、毎日窓から眺めてるくせに何處だねは一寸氣に喰はん来る人毎にきく、『やあ出来ましたね』位の處、どうも趣味のない人は話が出来ぬもんだ、其後は今日も一枚、明日も一枚と、人物、靜物、景色——色々描く、描いたものは全部部屋に懸けて置く、其中にはだん／＼經驗も積んで來る前に書いたのは土臺なつてゐない事がやつと自分にも解つた、これ

では第一枚のボグラの如き、人があまり振り向かうともしなかつたのも尤もだ、それでも褒めてくれた人がゐた、本當に褒められたつもりで喜んでゐる僕が彼れの眼にはどんなにか可笑しく映じた事だらう？。

に耽つてゐる間に、一步お先きに進まれて、内地人からおれの先祖だと仰がる、時代が來ぬとも限らぬ

秋 風 落 寞

京城商業會議所 大村 琴 花

江戸ッ子の先祖が平將門であることは誰も異存の無い話だが、動もせば向ふ鉢巻で飛び出す魚河岸の阿兄が、生粹の江戸ッ子だと思つたら大變な間違ひ。彼等の祖先は天正年間徳川家康が攝津の神崎川を渡るに船なく、困つて居つた際同國西成郡佃村の名主森孫右衛門君が村内の漁民を指揮して之を渡した功に依り、江戸海岸の一小島に漁業權を與へられ、孫右衛門君が村民三十四名と共に移住して佃島と稱したのが起源で、慶長年間に孫右衛門君の子の九右衛門君が幕許を得て日本橋の北詰に魚市場を開いた之が現今の魚河岸である

のであることは矢田挿雲君の『江戸から東京へ』をお讀みになつた方は先刻御承知の事柄である。

一種の侮蔑を意味するかにも聞へる江戸ッ子の所謂贅六が、何時の間にか立ち優つた豪勢なものになつて、却て粗忽な江戸ッ子が自分の代表者でもある様にもてはやしてゐるのは笑はせるが、世間こんな矛盾や獨りよがりは幾らもある。

朝鮮の人が内地人と同化するかしないかといふ様なことも、色々な人が色々なことを言つて居るが、是等も攝州の孫右衛門さんの一統が正銘の江戸ッ子より一層涼しい男になつて居られると同様に、中味の乏しい内地人が蝸牛角上の争

贅六の沈著な努力が長い間に鰻魚と共に潑刺たる氣質に一變したも

國家でも個人でも兎角油斷は禁物だ。どうも今の日本には不眞面目の氣分が多い。不景氣の風や行政整理の鈍に肝を冷やさるゝ輿梅を見て我國特有の氣魄はもうすっかり喪せた。何のその百萬石も笹の露てな味はいがどこにでも養はれた國だつただけれども。

◆ 篠田氏逸事

平田 久 雄

篠田李王職次官は、ズット以前東京で辯護士をやつてゐたことがある▲その頃のことだ、氏の友人の是れも某辯護士が往來で子供に小便させて、何十錢かの科料に處せられた▲處がそれに不服で正式裁判を仰ぎ、篠田氏が其辯護の衝に當つた▲何しろ歳は若し、元氣盛んな時分とて處罰令には『大小便をなし若くはなさしめたるもの』とある、處で本文を續むと、大便又は小便とは書いてない、一口に大小便とある故、單に小便させただけで本令を適用せらるゝ筈はないと、堅白同異の辯を弄すると無慮一時間ミラ／＼證據不十分——無罪となつた▲判事も檢事もこんな笑つた裁判はなく、結局篠田さんに命するに『小便辯護士』の榮稱を以てしたさうだ▲今一つ、氏は先程東京にのぼり、丁度二十八年振りに母校である一高を訪問し感慨無量、幾千の青年を前にして一場の演説をやつたが『どうもあゝいふ處へ時々顔を出さずにや不可ん、確に若くなるよ』と笑て居る

澁澤先生

— 明治初年の回顧談 —

日清生命支社長 横田瀧三郎

(三三)

私は曾て澁澤先生から趣味多き明治初年の懷舊談を拜聴したことがある、即ち予爵は曰く「銀行業なり郵便事業なり近來著しき發達を遂げたけれども、之れは日本にも昔から形だけは存じてきた。然るに保險業に至ては全く日本に無きものを輸入したもので、眞に困難を極めたのである。當時銀行業としては勿論無かつたが、昔、淺草藏前に札差しと稱して、富有なる人若しくは大名などの金を預り、之を諸方に貸付け有無相通じて利殖の途を圖る商賣があつた。猶交通に於ても京屋島屋などと云ひ飛脚と云ふ者、或は馬の背若しくは舟便に依つて、手紙の往復荷物の遞送等、不及ながら交通の便を圖つて居た。現今の銀行郵便等の制度は、恰も昔の大名制度を今の聯隊組織に改めたる迄の事である。

しかし保險事業は全く日本には形さへ無かつた爲め、經營と云はんよりは寧ろ會社を作るに苦心した

時、明治十二年自分は第一銀行頭取として、銀行にては東京大阪其他へ荷爲替等を取組む上に於て、東海道線は未だ成らず荷物は全部舟の便に依らざるべからずと云ふ状態で、眞に危険至極であるから

銀行業者當然の要求として、海上保險を思ひ立つた。然るに前陳の次第で保險の加入者を探すよりは却て保險業を創むる事に骨が折れた、即ち株金を集むる事は實に尋常一様の苦心では無かつた。斯くて資本家を説く必要も起つた、其頃の金持と云ふ者は、先づ祿を返上して奉還金を貰つた大名だ、そこで其れ々々目尻を付け、極力出資を勧誘した處が、先方の答へが面白い、澁澤氏何を始め、曰く

保險事業、抑も保險とは家が焼けて一定の金額を拂ふものが火災保險、人が萬一の事が有つた時一定の金額を支拂ふものが生命保險、又海上に於て船舶の遭難したるとき一定の金額を填補するものが、海上保險である、此事業は日本では始めであるが、歐米先進國に於ては相當なる業績を挙げ、我國に於ても前途有望なる事業で、而かも共存共榮の趣意に因り、確實なる數理を基礎として、自他共に利潤しつゝ國家社會にも貢獻する事が出来る、堅實有利の企畫であると極力説明を試みた。

然るに先方の曰く、澁澤氏折角の計畫だが今回だけは賛成が出来ない。其れは甚だ危険だ、火事は昔より江戸の花と稱して、火を失す

れば燒失家屋其數を知らず、人一生に一度は必ず死すべき者だ、猶漢洲灘邊に於て一度は暴風雨に遭遇せんか如何なる大船も骨灰微塵とならう、寔に危険の事だ、聞いても悚然とする。其れを殊更に當方より無理に損害を見込んで危険に投ずる必要は無からう。又之れを營利事業として經營せんとするは大なる目算違ひだ、若しやるとすれば特志家の醜金に依り、慈善事業として爲すべきものだ。と十八一饒、萬口一致、恰も相談したかの如き答辭には、這がの澁澤榮一も、只だく呆然たるの外は無かつた。

◇ 勿論人文の開けざる時代に於ては又無理からぬ次第で、其當時文明の發達は何よりも交通機關の設備に俟たざるべからずとなし、偶々東京より青森迄の日本鐵道株式會社が發起せられ、沿道の富豪に向つて、株式の應募者を勧誘した處後ちには國有鐵道として、買上げられ出資金額の數倍となつて戻つた有利なる株式でも、其當時に於ては遲疑して引受くる者も稀れであつた。沿道の富豪の曰く「陸蒸汽」と云ふ者の速力は御綿と何の位の比較なるや、若しくは早馬と何ちらが速きやと、愚問百出の有様である。其時代での保險會社の製造だから全く想像外であつた。

◇ そこで、今は故人となられたが益田孝氏の令兄に益田克徳と云ふ人が、歐米留學を終へて農商務省に勤務して居つた。此人は新しい學問をして來た人だから其人に相談して力を借り、そうして會社を作らうと思つたが、其頃の同氏は所謂新進氣鋭で後ちには大臣に

大凶變の日

野口喜代子

でもなる氣魄だつたから、民間の事業なら、御免だと云ふてなかなか承知して呉れない。そこで月給を澤山出すと云ふ事に話を進め、自分と同額なれば如何と云ふ事になり、其時第一銀行頭取としての濫澤榮一の月給は金五十圓だつたから、其月給金五十圓で愈益田氏に經營の任に當つて貰ふ事になつた。併せてそこで益田氏が保險の性質を最も俗耳に入り易き様に説明を加へた。即ち危險と云ふ者は集注すると危険だが、之れを平均すると決して危険でない、例へば彼の線香花火でも一本づゝなれば樂しみだが、之れを集注すれば爆弾ともなる。又人が萬一の事があつて保險金壹千圓取つたと云へば遺族は多少助かるが、之れを百萬入程の團體とすれば一人當りの出金額は僅かに一厘宛だ、此一厘の金は誰れでも乞食に呉れても痛痒を感じざるも金壹千圓となれば力になる。之れが保險の制度である、斯くて漸く今の東京海上保險株式會社が出来た』と。

我日清生命も大隈侯、濫澤子等の發起に係り、明治四十三年創業三周年に當り、時の社長男爵前島密氏は朝野の貴顯紳士を向島八百松に招待して、併せて我社も契約高壹千萬圓に達し年々の収入保険料金も五十萬圓宛を得る事となりたるを以て、會社の基礎は磐石の如く墨堤二八の装ひは我社の前途を祝福する者の如し云々と、形容詞たつぶりの挨拶を述べられた。時代は推移した爾來駸々乎として順蹠なる發展を遂げて年々貳千萬圓以上の契約高を擧げ今や將に累計壹億圓を突破せんとしてゐる隔世の感ありとは一片の形容詞ではない

本篇の筆者は篠田李王職次官の令嬢であります、次官のお許しを得て喜代子さんの御近著から左の一節を（一記者）

九月一日の午前中は、鬱陶しい空模様であつたので、とちこめて一郎のそばで漱石氏の『二百十日』など讀んで居りました。私は正午頃突然起つた激しい震動に、思はず脇へ一郎を引よせたまゝ逃げ出す事も出来ぬまに、倒れ落ちた屋根の下敷になつたのでありました。逃さうなどといふ事は考へる餘裕もなく、只やたらにふり動かされ、凄しく鳴動する家の中を、腰も立たず茫然と一郎を抱えた儘あちらこちらとするくすべり廻つてゐた。そのうち傍の襖が倒れかゝり鴨居が落ち、床がはづれ見る／＼家はベシヤンコになつてしまいました。

だが折り重なつた屋根や材木の下からいくらか叫んでも、人通りの少い此の官舎町では、人に聞える筈もないが、此のまゝ死んで了つては、何も知らぬ頭是なき一郎が可愛そうでたまらぬ、何とかして助かるべきすべもがなを聲をしぼつてなほも叫びつゞくる中、かすかに『助けて上げますからしつかりしていらっしやい』といふ聲が聞へました。

あゝ地獄で佛とはこの事であらうか、私は救はれるのである。はりつめた氣は一時にぬけて、首をもたげる力もなくなつた。やがて向

ふのすきまに二人の男の脚が見えメリ／＼とそこらをめくる音がしはじめた。先づ一郎を引出し、續いて私も腰の上の軍みが幾分軽くなつたと思ふと、頑丈な男の腕に引きすられて、變りはてた此世に出ました。

先づ目についた光景は、前の赤十字社の壁はきれいにはがれ、煉瓦造りの方の屋根がすつぱりとんでおとなりの官房主事官舎の庭に入つてゐたのであつた。一人の男は一郎を抱き、他の一人の男は私をかゝえて、とにかく知事官邸の門前へつれて行つてくれました。私はべたりと地上に坐つたまゝ動けなかつた。一郎は驚いた様な顔して、私の胸に頭を押しつけてゐる

山

工藤 ゆり子

そのかみはほのほを吐きて荒れにしを靜に今は眠りたる山

大地は引つづき波を打つてあえいでゐる。すさまじい爆音があちこちで起る。激しい風が吹きまくる水道は止つた。あゝ火事がなければいゝがと話し合つてゐるうちに方々からむく／＼と恐しい黒煙が立ちのぼり、見るまにひろがつてゆく。眞赤な煙が黒い煙と氣味悪い色にそめて此世を一なめにせんする。物凄しい太陽の色、何といふ恐ろしい光景でしやう、此世の終りかと怪しまれた。

樂 堂 佳 筵

雜 筆 書 房 主 人

【三〇】

大なる酒瓮に香のぬくこと天地を去る春よ何處ぞ

樂 堂 樂 堂氏『これは大きな』と感嘆し、往年大同江を下る時の、

江のあなた沈む夕日の影に見よこの世過さん天地廣き

○ 小龍氏達摩を描き、西崎氏『朱顔彩傳落紅霜』を題し、又露聲

氏調世音を描き、左の句を題す

○ 初秋や冷かに坐す調世音

白 翁 白神先生書及び句あり

○ 雲に入る龍の威勢や奴だこ

○ これより場を料亭『川長』に轉ず、徳野氏『某妓に與ふ』

○ 狂 雨 人等皆酔ひて騒げる部屋ぬちに我れ獨りさめて君を眺める

右に和して

たよ一つ眞砂の中の眞玉とも愛でつゝひとり眺めくらさむ

又『詞入俚語正調』

○ 眺め暮して闌干近く『花不言人不言』櫻吹雪の膝頭

◆ 高水背水氏

平 田 久 雄

高木背水書伯は、咸北の中野知事と親交があるので、過般の共進會に咸北八景といふ大作を書いて出した▲處が、共進會の一部が出火し、書も又烏有に歸したので、律氣な書伯放擲つて置くわけに行かず、總ての入費自辨で又ぞろ咸北へその再探毫に行つたことゝらは一寸背水式——眞似は出来ない

ありしと披露す。

樂 堂

○ 西崎の鶴がつるやの主人つれ、鶴屋の宿にとまりつるかな

樂 堂 樂堂氏又今秋平南成川に遊び、東明館の荒廢を見て

樂 堂

○ 畫虫の鳴くにまかせて高樓の壁畫語らず秋の風吹く

○ この間白神先生その平昔の得意作を録して余等に見す

白 翁

○ 花散るや縋いて見る南朝史右に和して

樂 堂

○ 緋おどしの鏡で跪坐す花の前

露 聲

○ 霞む千里の駒追ひのぼる、鏡小具足花の塵

○ これ迄黙々として玉盃を傾けし

小瀧氏突如筆を呵して

興 齋

○ 恰似夜鴉交白鶴、低頭緘口汗如汗

又

同 人

○ 山がらす都の鶴に交りて恥のみぞかく今宵なりけり

○ 露聲氏酒瓮を描き、これに舊作を題す

露 聲

十一月十五日、西崎樂堂氏鎮南浦

より京に入り、越へて十八日、故舊を會して京喜久に飲む。この夜集るもの森、野田、小龍、白神、徳野、松本、——宴半ばにして有賀、篠田、膳の大先輩も『いようこれはく』とて席にあらはる。

蓋し近來の佳筵也。この夜即興頻りに發し、山の如き短冊、色紙、畫箋紙忽ち盡く。諸公が如何に牢騷の氣を吐發したるやを思ふ可し今その二三を下に録す。

○

森植銀往年鎮南浦にあり、佳吟『祇園千軒』を詠じ、永く同地の絲竹にのこる。西崎夫人之れに擬して『一目千本』の作あり樂堂氏又之に和す、三作を並記すれば

森 露 聲

○ 祇園千軒緋の長編絛素足寒から春の雪

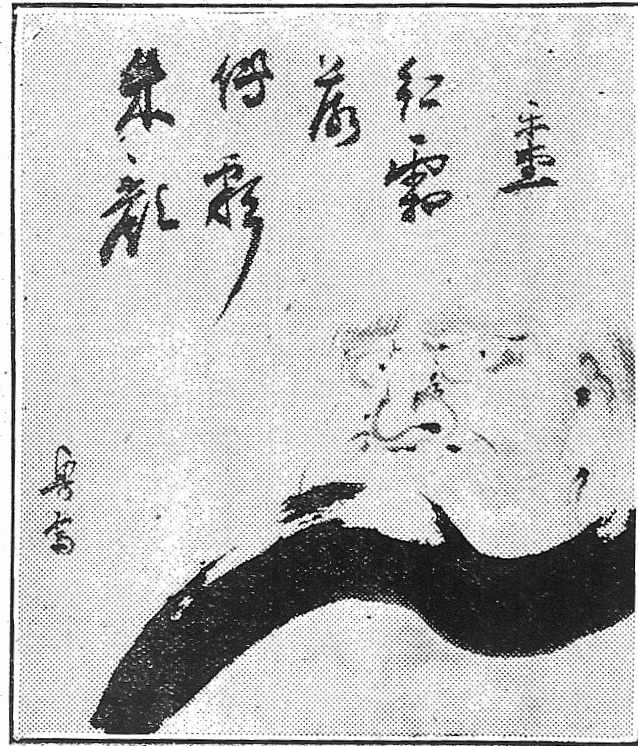
西崎 夫人

○ 一目千本吉野の柳刺繡か檣櫓か春の雪

樂 堂

○ 本所松坂吉良侯の屋敷晴れてうれしい今朝の雪

○ 話題は右の懷舊談に始まり、次いで今春西崎氏鶴屋主人(堀貞吉氏)を伴ひて咸北に遊び、はからず旅亭に投宿すれば、是れも亦鶴屋なりしに依り左の即興



浮世大學講義錄

お歳暮の巻

その沿革定義効力

螺 炎 今 村 軒

一、御歳暮の沿革

人心淳樸、生活安易なりし古代に於て、報恩、謝禮、社交等の目的を以て、歳末に方り、物品を進進贈答するの美風行はれたりしが、後世に至り人心次第に輕薄となるや、此有意義なる年中行事の本旨を没却するのみならず、却て之を悪用し、因襲的無意味なるものと化し了し、善良なる風俗を害するに至れり。

二、御歳暮の定義

御歳暮とは年末に方り、或る關係を有せる一方より、相手方が之れを受くるの意志あると否とに關せず、無償にて物品を贈與し、相手方が之れを受くる意志表示を爲すに依り、効力を生ずる法律行爲を謂ふ。

此の定義に據れば、御歳暮の成立には四の條件を要す、以下解説すべし。

(時期の條件) 十二月中を其期間とす、但除夜の鳴鐘前は舊年の延長と見做す習慣法あり、故に十一月は期間外たるを無論也、是れ人が或進物を爲すべき時、成るべく年末に繰下げ、御歳暮と併せて執行し、負擔を輕減する所以なり

此期間内に於ても、二十五日以後此法律行爲は頻繁に行はる、何となれば、凡そ一家の主婦たる者は家庭經濟學應用上、歳暮は豫じめ到來品を轉用する胸算ありて、互に相推諉し、遂に切迫實行せらるゝものなればなり、一籠の鴨が、一日數十家を轉々して元の家に戻り來りし如き、敢て奇とするに足らず。

(物品の條件) 物品の種類には何等制限なしと雖も、人の厭惡する物、野卑なる物、奇拔なる物、價甚しく低き物は使用せられず、是れ歳暮は先方の感情を尊重すべき本質を有すればなり。

普通には、酒、煙草、菓子、砂糖魚鳥、反物、文房具、陶漆器等用ゐらる、例外として債券なる商品切手を使用することあり、最進歩せる手段なれど相手方の身分によりては禮を失す、而して現金は絶對に使用せられず、中世紀に於て菓子折の二重底に紙幣を忍ばせたる、犯罪行はれしが、近世文化の發達と共に跡を絶つに至れり。

冷靜に觀察すれば、凡そ歳暮なるものは、愚人の行爲なれば、往々にして其愚を表現せることを發見せらる、贈呈者の愚案は皆其揆を

【三六】

一にし、其物品は、廉價なれど、見高く値踏せらるべく、嵩ありて體裁よく、氣の利きたるものを選定したる、苦心慘憺の跡ありと雖事實踏み倒さるゝ事鮮からず、此點を顧慮し、不注意を裝ひて故らに正札を殘留し、或は其の文字を半抹消する手段行はるれど、却て先方に心事の狡猾陋劣を看破せらるゝに終る。

(送付者の意志表示の條件) 口頭、書面何れに依るも妨げなしと雖、唯歳暮と記し双方の氏名を明瞭に記載するを以て足る、送付先の氏名を略する時は、往々門運を爲して他人に隱微を囁るゝの虞あり、又轉用の時元の名刺を剝離する際は、痕跡を殘さるゝる機巧妙なる伎倆を要す。

(附送達方法) 其方法としては本人又は妻自から攜帶するもの、車夫、書生、女中等の代理人を派遣するもの、商店送達を依頼するもの等の區別あり、先方との關係如何により定むべく、一概に其是非を論ずべからず、商店より直接配達の方法は、轉用品に非ざることを證明するの利あり、而して先方の受領、拒否は一に代理人の能力に繫れるものなれば、要は其選任に注意すべきなり、妻を派遣したる時、忙中閑談に時を費し、先方の夫人に忌嫌せらるゝ如きは歳暮の効力を減殺する者と知るべし物品を持込むには、内支關又は臺所口を可とす、荷車、擔軍等に多數の物品を積み、門前、支關前等に露出するは慎むべき事に屬す。(受領者の意志表示の條件) 簡單なる謝辭、又は名刺の交付により、歳暮の法律行爲は完成し、所有權は完全に移轉す、間々預り置くと云ふ返答ある事あり、之れは

二様に解釋せざる可らず、一は威嚴を装ひたる默示の受領意志表示と看るべく、一は實際主人不在等により受否を決定し能はざるものとすべし、兩者共に二三日を経過し、先方より返送無き時、完全にパスせしものと認定安心すべし。

三、御歳暮の効力

御歳暮の効果に付き研究するに、大様以下の三種に區別するを得べし、即ち(一)効果あるもの(二)効果無きもの換言せば毒にも薬にもならぬもの(三)却て害あるもの是れなり。

(一)に屬するものに二種あり一は誠意至情の發露せるものにして何等對價欲求の意なし、如此ものは物品の精粗多寡に拘らず人を感動せしむる力あり、二は僅少なる蚯蚓の餌にて、特殊の利益寵遇の鯛を釣らんとするもの也、歳暮の大部分は多少此臭味を帯びざるもの鮮なし、されどそは貪慾なる相手方に對する時のみ効力あり、凡そ男子たる者の眞面目は、俗患なる世事に貴重なる頭腦を係累せらるべきにあらず、何人より何を受けたる乎は一々忘却するを普通とす、結局詮すれば、僅かに先方夫人の歡心を買ひ得るに過ぎず、折角苦心慘憺の結晶は(二)の無効果となり、或は(三)の惡結果を招來するに至る、例之、返禮の迷惑をかけ、或は腐臭ある魚鳥、岩の如きカステラに先方の感觸を害し、寧ろ爲さざるの優れるに如かざるとあり、初より好き返禮品獲得の意を以てする如き、何れも心事の卑劣なる、乞丐にも劣ると謂つべし。

四、御歳暮と法規の關係

——(民法) 其契約の性質は、

請負に類するものあり、不當利得あり、交換等の各條に該當するものあれど大體贈與なること先に述べたる如し。(刑法) 嚴密に、授受兩者の關係を討索せば、社交の禮儀を越へて、背任罪、賄賂罪等の犯罪線へ侵出せるもの、絶無にあらざるべし。(行政法) 官吏職務規律には、明かに、『凡そ上官たるものは職務の内外を問はず、所屬官吏より贈遺を受くることを

得ず』と規定せり、心すべき事也
五、結論
要之、現時行はれつゝある、此年中行事は、因襲久しふして人之れを怪まざれど、詮すれば、奴隸道徳の遺風にして、彼我人格を損すること甚しく、現代の進歩せる思想と相容れず、如此百害あつて一利なき社會の愚習は、斷然文化生活より驅逐すべきことを、大方に向つて提唱す。

先師の墓畔

本町三丁目
まらぎや屋

安達清太郎

◎私の先師は、今光熙門外の墓地に、靜かに、やすらかに、永き眠りに就いて居られます。

◎先師が肉體を有つて居られた時は、會はうと思つてもなかく會ふことは出来ませんでした——だが一たび靈界に入られてからは冥目合掌すれば先師はいつでも髮髯として私の前に、尊い御姿を現はされます。そしていつでも私を正しきへ導かれます。

◎先師の墓畔に跪くことは、私の生活の中で、最も悦ばしい瞬間な事です——この間も朝早く先師の墓前へ——それは新町遊廊を横きつて參りますと、或る青樓から今俤に乗らうとする男があります、忽然顔を見合せると、それは私の知人だつたのです、私は深く彼れを憐むと共に、彼れの如く五慾のやつことならざる己れを顧み、これも又先師の冥護に依るものと、

深き感激を抱いたのです。

◎さて先師の墓前で、心ゆく迄合掌祈念して居ると、或る年輩の夫婦がそこを通り過ぎて『ねえあなた、私が死んだらあなたもあゝしてお参りしてくれて?』端なくこの語が私の耳にとほりました——あゝ多くの人達は生活を遊戯視し

◆ 鶏頭花

小松久子

美しく葉末における露の玉ふれ
なば染まん鶏頭のいろ

てゐるらしいのです、そこに少しも嚴肅の影がない——私達は眞實に、正しく清く生きんと願つて居ます、生活に『魂』があります、併しこれも又先師の教導によるものと、改めて又私は合掌拜跪したのであります。



空界私見

—航空界より見たる日本—

京城日日新聞社長 有馬純吉

上より投下せる爆彈の總噸数は一千萬噸以上に達せりとは、當時尙ほ開戦中へীগ元帥の公報の示す處であつて、之を日本に於ける鐵の總ての需要高に比すれば正に二年半分に相當するものであり、又假りに之を日本の都市に投下するものとせば、有らゆる日本の都市の坪當り二、三彈落下の比例となるとは或統計家の統計する處であると聞くのである。

大正九年行はれた所澤京城間、朝鮮海峽横斷の長距離飛行は、和田小關、田中三飛行中尉に依つて見事なる成功を収めたのであつて、我國航空界に一新紀元を劃したるものとして、當時吾等は我國航空界が將來異狀の發達を見るべく大に期待する處があつたのである。然るに這次行はれたる、同じく所澤京城間の爆撃機飛行は、必ずしも豫期の成績を収め得たりと云ふを得ないと思ふのである。固より之れと彼れとは飛行機の組織に於て、又重量噸數等に於て、大に異なる點はあるも、其成績の結果に於て、世間の期待を裏切つた事は事實である。

のであるが、大亂に依つて其技術は益々試練され發揮され、戦後の今日に於ては更に航空郵便、航空貨物輸送の開始より延びて幾千哩の國際長距離飛行の壯學を斷行する殆んど朝飯前の如く、而して完全なる成績を収めつゝあること、實に恐怖すべきものがある。

古來永遠の命題として、人類の前に提示せられて居つた人類天空の飛翔は、現に彼等西歐人の努力に依つて完全に解決され、是れ迄地上の征服者たる人類は、更に空中の征服者となつて、人間間に於ける地上の争闘は、移つて今や空中に輸贏を決せんとする大勢となつたのである。即ち空權の占有者は艦隊であらゆる地上の征服者たらんとしつゝあるのである。歐米列強が今や争つて空中政策の行使に熱狂しつゝあるの所以は亦茲に存するるのである。

古來永遠の命題として、人類の前に提示せられて居つた人類天空の飛翔は、現に彼等西歐人の努力に依つて完全に解決され、是れ迄地上の征服者たる人類は、更に空中の征服者となつて、人間間に於ける地上の争闘は、移つて今や空中に輸贏を決せんとする大勢となつたのである。即ち空權の占有者は艦隊であらゆる地上の征服者たらんとしつゝあるのである。歐米列強が今や争つて空中政策の行使に熱狂しつゝあるの所以は亦茲に存するるのである。

勿論現在に於ける我日本の一般航空界が、大正九年頃の夫れに比し相當の進歩發達を遂げて居ることは、否認すべからざる事實ではあるが、之を歐米諸國の斯界發達の現狀に比すれば、我國航空界の前途は、前途猶ほ遠景と云はねばならぬのである。歐羅巴の航空界は往年の歐洲大亂前に於て既に驚くべき程度の發達を遂げつゝあつた

彼の歐洲戰場に於ける交戦國各航空隊の活躍の目醒ましく、華々しかつたことは、吾々東洋人をして驚異に値せしめたものであつたが而かも英國が歐洲開戦以來飛行機

一段の妙なりとせねばならぬのである。斯くては我が日本民族の危険は云ふ可らざるものがあるのである。斯の如きは國家の存立に關

する重大問題であれば、之が對策を講すべく國家も國民も共に奮起卓勵一番せねばならぬのである。然らば之を防護するの策はどうであるかと云へば、唯だ我航空界の發達を益々期圖し西歐の其れに匹

敵すべき進歩を遂げて、空中の防備を完成し、更に進んで空中攻略の方途を策せねばならぬのである。勿論専門家の見る處もあらぶが、其能く之を成さんとせば政府も國民も今少しく心血を飛行界に傾注

し、二面飛行家を優遇する方法を講ずると同時に設備其他に要する航空豫算をして、先進各國に比し餘りに大差なき程度に政府も國民も奮發するの意氣と決心がなからねばならぬのである。

月百首

李王職 末松熊彦

雨 月

月影のあるかなきかのあまもよい
秋とはいへどおぼろなりけり

露 月

風吹けば草葉の末におく露と
ともにこぼるゝ月の影かな

燐 月

炭かまの煙たちそふ片山は
月のあはれもます心地かな

山 月

山ふかくすめる庵の月影は
うき世のほかの眺めなりけり

峯 月

白雲のたえずたなびく峰にだに
今宵は月もすみわたるかな

谷 月

光なき谷ふところの底までも
今宵の月は照りとほりけり

岡 月

秋の夜は月に背ける里よりも
向の岡ぞ住むべかりける

川添氏の事

平田久雄

鑑南浦商議會頭川添氏は、今後折々本誌に執筆せらるゝことになつた▲氏は年齒四十位、恐らく全鮮の會頭中最年少の人であらう▲商工會社の社長をやつて居るが、運動方面には最も理解があり、勤務時間でも過ぎると、眞ッ先に立つて運動場へ乗り出す、テニス御座れ、野球御座れ、盛んに勇躍するので、若い社員『ウチの大將はわかつて居る』大に心服してゐるさうな。

トンダ失敗

平田久雄

前號今村さんの『鼻をさすりて』の中に『昔弓削某の男根の美事さは』とある。——忽ち今村さんから抗議が來た『男根はひどい、あれは男振りぢや』——ナール程、これは大失敗▲處で今村氏が會て某誌に『寢腹這ふて世を罵らん暮の秋』を寄すると『寢腹這ふて夜を罵らん暮の秋』▲そこで今村氏歎じて曰く『僕のはどうも際どい處で間違ふわい。——兎に角申謝ござらぬ

京城昔話

山口 太兵衛

人位でやはり拾圓位の費用が懸つた、是等は一敷へ寄附と云ふ譯にも行かぬので、領事に五圓と私が足して後を補つて行つたものであつた。

◇又一面當時の商業議會も人員が少いので結東の堅い點もあつたが非常によく一致して而かも國家的に活動したもので貿易上の事に就いても種々研究調査をしては事毎に委員を派して仁川に交渉し或は外務省或は各縣廳へ獻策もし獻言も爲したものである。

◇一例を擧げるなれば陶器類の如きがそれで、當時朝鮮には實用向の、それは誠に脆弱極まる瀬戸物のみで殊に日本人の使用すべき品はなかつた、之を佐賀縣廳に交渉して伊萬里有田燒陶器の輸入を勧めたのであるが、何しろ初めてのことであつて伊萬里の同業者達も、萬一賣れない時の心配ばかりして容易に朝鮮に乗り出さうとするものがなかつたが、結局京城では雜貨商申合せの上一割の利益を保障

◇雁來紅

橋本桂堂

雁わたる頃にやあらむ雁來紅葉
末はやくもそめ出でにけり

してやると云ふ條件をつけて二三人の有志者に輸入を試みしめた。ところが輸入の品物は京城に於て希望者を集めて競争入札を爲さしめた結果案外成功して荷主は一割どころか二割も三割も儲けて喜んで歸り、それから盛んに陶器の輸入を行ひ、終には數人協同して陶榮社と云ふのを組織して大に發展した、其の爲め南大門外と鐘路にあつた、鮮人の大きな陶器商も遂に姿を隠した程である。

◇學校の方でも居留民會が愈々正式に豫算を組んで仕事をされる様になつた以上、正則の教育を施さねばならぬと云ふので明治廿四年に之を公立學校とし御眞影を拜戴して師範出の立派な教員を迎へる事になつて第一番に呼んだのが大分の人で、麻川松次郎君であつた。

◇同君には月額二十圓の俸給を支拂つて居たが、廿五年更に一名を増員せねばならぬやうになつたが何しろ貧弱な民會の豫算で相當の俸給を支拂ふ事は困難であり又一方内地から朝鮮に来るのは内地よりも幾らか高い給料を出さねば、遙々來て呉れる者がないので何處からでも自由に雇ふ事が出來ず、仕方がないので私が豫ねて懇意であつた、鹿兒島中學の校長に依頼して、内地よりも幾らか安い給料で獻身的に働いて呉れる人を寄越して呉れと頼んでやつたのである。そして住居や食事の方は私の家で不自由のない様にお世話すると云ふ條件で俸給は月額拾圓の約束で鹿兒島から松崎陶直君が二番目に渡鮮して呉れたのである。

◇翌廿七年度には居留民が約八百人學校生徒が五十人許りになつたこの年即ち廿七年に日清戦争の火蓋は切つて放たれたのである。

◇開戦となるや、お寺も役所も民家も全部軍隊の宿舎として提供して教員も徴發従軍したので勢ひ學

校も休校せねばならぬ状態となつた、此時分麻川松次郎先生は鮮人師範學校の教頭として朝鮮側に移り、居留民會の方では更に早川清範と云ふ教師を迎へて、此の休校期間を利用して正式の學校を建てた方が好いと云ふので建築せられたのが南山町にある前の高等女學校——今の南山小學の一部である其後此の學校は四回も増築に増築を重ねる盛況で、日露戦争の時に至り日の出小學校の建設となつたのである、そして現在京城學校組合の管理する其他幾十の學校の増設を見るに至つたのである。

◇以前日清戦役前後の學校では運動會の如きも、仁川では早くからあつた關係上、可なりの設備もあつたが、京城では何等の設備もあつたところではなく、義務教育が漸く位で運動會の經費等は一厘もなかつたのであつたが、それでも毎年春秋二回の運動季節には、必ず私も一緒に出掛けて、訓練院の廣場、獎忠壇の林間、馬頭山と云つて今の總督醫院の松山で、一方に昔支那兵の練兵場があつた邊りへ連れて行き何等競技の方法等もないので、其邊の野原で、自由に跳ね廻らして一日を楽しく遊ばせると云ふに過ぎなかつた、それでも生徒の携帶する辨當は別として湯茶の用意とか、子供等に與へる菓菓子少々、それを運ぶ人夫二

雜筆書房漫記

永樂町人

莊子

莊子の講義を聴いたのは、二十一の時であつた。

田岡嶺雲氏が、私の郷國の新聞の主筆として滞在し、傍ら自宅で伐柯書院といふ私塾を開いて居たので、私はそこで一年許り聴講したわけである。

莊子には餘程の自信があるらしく、學生の仕事として、それに關する論文を書いて見たい——先生は折々さういふ述懐をして居られた。

明治四十三年日光で没した。マダ四十の上を幾らも越しては居られなかつた。——論文は遂に世に出でなかつたが、その和譯本は、夙に刊行されて居る。——その叙文などを讀むと、流石に多年沈潜せられただけに、精識博通、おのづと頭が下る。

又

何分二十二の時であつたので、先生の名講義も、ろく／＼私の腹には這入つて居ない。だから今莊子を開けて見ても、難解であることは、學ばぬ以前と妙しも變ることはない。——多少し性根を入れて聴いて置かなかつたことを口惜しく思ふ。

又

尤もそれから二十年の星霜を閲し私もいくらか世間的、人間的經驗を積んだので、大意は自然と心に

氷解して來るやうに思ふ。——但しこれは年齢の驗である。——良帥に孤負したことは、何處迄も遺憾に思ふ。

李白

十六七歳から引つゞいて愛讀して居る書物は、青蓮詩集である。

李白の世界は廣大である——『山中問答』『山中獨酌』といったやうな仙士道客の世界もある。『將進酒』『襄陽歌』といったやうな酒徒の世界もある。或は亦『梁甫吟』『遠別離』といったやうな經綸、抱負の世界もある。

私は自分の身境の流轉するたびにそれ／＼愛玩す可き世界（詩境）が——いつでも李白の中にあることを喜んで居る。彼れは大きい湖水のやうなものだ。いくら酌んでも新しい生命の盡くる折はない。

又

『子夜吳歌』や、『峨眉山月』や『山中答俗人』や、千古の絕唱であることは、どの日本人にも富士が名山であるのと少しも變らない私ほもとより李白の大才に異存はない、その雄篇大作を讚仰する。けれども現在の私としては、その大手筆、大量の李白が特に小手先を玩んだと思はれる『相逢行』や、『陌上贈美人』や、『對酒』や、『越女詞五首』が最も快心である。

相逢行

相逢紅塵內、高揖黃金觀、萬戶垂楊裡、君家阿那邊。

對酒

蒲萄酒、金叵羅、吳姬十五細馬歌、青黛畫眉紅綳靴、道字不正嬌唱歌、玳瑁筵中懷裡醉、芙蓉帳裡奈君何。

それは栖鳳、大觀が特に雀の二三羽を輕灑したと同じい氣輕るさど鮮新がある。

芭蕉

芭蕉を讀んで居ると、その『さびしほり』が、餘りに心に浸潤して來る。私は何だかこの顔に——心の門に蜘蛛でも巢を張るやうに、幽鬱になる。

芭蕉の開寂も勿論悪くない。——けれども李白の場合と同様、その戯れに小枝巧を弄したのも却つていゝと思ふ。

小野炭や手習ふ人の灰せりり
緑ゆふ片手にはさむ額髪
落さまに水こぼしけり花椿
春雨や蓬をのぼす草の道

茲に至ると、あの翁もなかく／＼明らるい魂の持主だったのである。

韓愈

韓愈はいふ迄もなく晩唐の大文豪である。

けれども彼れの文章は決して輕快なものではない。——彼れはいつても『李氏子蟠年十七、好古文六藝經傳皆通習之、不拘於時、請學於余、余嘉其能行古道、作師說以貽之』といふ窮屈さで文を書いて居る。

私はむしろ彼れの詩を愛する。それは餘技だけに却つて彼れの天真を見る。

『示兒』や『短檠歌』や、好詩で

ある。茲には早春を抜いて置かう

早 春

天街小雨潤如酥、草色遙看近却無、最是二年春好處、絕勝煙柳滿皇都。

燕 村

一應は燕村に参らぬ者はなからう

春雨や物語り行く鏡と笠

春雨や綱が袂に小提灯

春雨や小磯の小貝濡るゝほど

初時雨帽に烏帽子の雫かな

何といふ豊麗の世界だ。——けれども長夜の感嘆は、遂に茶漬の一杯に如かぬこともある。勿論それがために燕村の大技量、大天分を根こそぎ否定しやうとは思はぬけれど——。

編輯後記

社 同 人

◆大正十三年は、例に依つて、夢の如く、水の如く経過してしまつた。

◆が、我社同人にとつては、この一年は決して夢、水のたぐひではない——それは正に感激の一年ともいひ得る。つまりらぬ雑誌ではあるが、愈々基礎の確立するまでは何處迄も後援しやうといふ先輩がある。更らに寄稿をお願いして會て謝絶せられた先輩はない——皆喜んで筆を執られた——それを思ふと、先輩の恩(?)、江湖の恩(?)といったものを深く感銘せざるを得ない。

◆社は決して樂ではない、併し經營者は伸にも乗らず、料理屋の酒にも酔はず、依然として弊衣粗服でやつてゐるから、決してツブレル心配はない、否來年は誌齡一を

加へるので、少しは改善も出来るであらう。

◆さてこの十二月號は、メ切期を十日ばかり繰上げたので、原稿には少々弱つた——といふのは、官場には整理があり、民間には決算季——或は歳末を控へて居るので

◆寄稿に就て

- 一、寄稿家は政治を論ぜざる事
- 一、成るべく十五字詰、百十一行を越へざる事
- 一、一日でも早く送付し、編輯者に工夫の餘裕を與ふること
- 一、次に原稿の配置はその到着順によること
- 一、右の條々御含み置願います

悠々ペンを執つて雜筆を助けやうといふ特志家は、よけい居らぬ。

——が併し御覽の如くチャンと編纂を了へた——特に本號寄稿家に叩頭拜謝する所以である。

◆處で、これから又正月號——歳末に向けて——つくらねばならぬ一難去つて又一難、聊か頭痛が致す——が先輩同情者は多い——大に依頼心の力を假つて、自ら勵まして居る——斯くの次第故、どうか御送稿は早い方がいゝ。——原稿メ切十二月五日。

大正十三年十一月卅日印刷
大正十三年十二月一日發行

一部定價金四十五錢

發行兼 松本 武正
編輯人 前原 登久雄
印刷所 京城日報社

發行所 京城雜筆社
電話光化門三〇六番

辯護士

榎本 隆

京城明治町二

辯護士

高橋章之助

京城仁寺洞

細工の御用は

本町

徳力へ

電本三九三九

金白銀金

地金/御用ハ

京城明治町

徳力本店出張所
電本二〇八八

向上靴

紳士向
學生向
女學生向
各種

向上靴は彼の有名な教化事業向上會館産業部の製品
で御座います、事業の性質から『正しき製作』と
『正しき材料』とに依つて作られ、之に『正しき價
格』を付して賣られて居ります、何卒御試用の上御
批判を給はり度存じます

京城南大門通り

向上靴
一手販賣店
丁子屋洋服店

電話本局
長二四六
二二九九
三〇九〇
番

休日なし 毎日夜九時迄營業——御用の節は店內クツ部御呼出被下度候

官製食卓鹽

朝鮮總督府專賣局製造の本品は理想的經濟的の調味料で文化生活に缺くべからざるものであります
 徳用大瓶小型振出瓶等數種の美しい瓶入で價格低廉です是非御使用願ひます

京城府南大門通二丁目九八

發賣元 富田商會

長電話本局三三〇九番
 振替京城四五六八番

冬物背廣服
 同オーバ
 レインコート

新地質續々着荷

仕立念入り價格は安い

經濟的理想の既製品頗る豊富

▲御注文に應じ特製仕候

京城 鍾路一ノ一九

角田洋服店

電話光化門九五五番
 振替京城一八四三番

標

新 設
電 話 開 通

時

時計及貴金屬の

御用は

電話本局三一六六番へ

時間の御問合せは

電話本局四七一番へ

準

京 城
村 木 時 計 店

計

京城府鍾路一丁目

濱 洋 服 店

電話光化門二四四番

京
城
日
報
社

金剛山産松の實應用菓子

金剛飴
 金剛山
 金剛饅頭
 金剛煎餅
 金剛羊羹
 金剛おこし
 金剛しるこ
 金剛柏子菓朝の鮮菓子 松の實菓子
 金剛ぼんぼん
 金剛うに
 金剛このおた
 金剛でんぶ
 金剛ほし

電話局本
 番七二
 番五七四

龜屋商店

町本城京
 目丁二

◎銘仙と

毛糸◎



京城本町
あづまや

堀内満輔

電話本局
八五五
九〇〇
〇六五
番番番

◎多少に拘らず御用命

の程を願ひ上げます